

(2) 特別支援学校のスポーツ環境に関する調査

主な調査結果

特別支援学校の5割が知的障害、8割に重度・重複障害者が在籍

全国の特別支援学校の障害種別の内訳は、知的障害の単置校が5割と最も多かった。2013年度調査と比較したとき、知的障害(単置)とその他の複数障害(併置)の割合が増えていた。重度・重複障害者が在籍している学校は全体の約8割で、視覚障害(単置)、肢体不自由(単置)、知的障害と肢体不自由(併置)、その他の複数障害(併置)では、ほとんど全ての学校に在籍していた。【図表 2-2、2-10】

日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導員資格を有する教員がいる学校は約2割

約2割の学校に日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導員資格を有する教員がいた。障がい者スポーツ指導員資格と保健体育免許の両方を有する教員については、「1人」と回答した学校が約6割であった。【図表 2-14、2-15】

運動部活動・クラブ活動の実施は6割で、聴覚障害、視覚障害で特に盛ん

2013年度の調査結果と大きな変化はなく、運動部活動やクラブ活動などを通年で実施している学校は全体の6割だった。障害種別にみると、聴覚障害(単置)では9割、視覚障害(単置)では8割の学校で運動部活動・クラブ活動が行われていた。【図表 2-17】

視覚障害はフロアバレー、グランドソフトなど視覚障害者スポーツの種目が人気の一方で、学校が実際に必要としているスポーツ用具は障害の枠を越える

小学部から高等部専攻科を通じて、全体的に実施率が高かった運動部活動・クラブ活動の実施種目は、「陸上競技」「卓球」「サッカー(ブラインドサッカーを含む)」であった。視覚障害では、「フロアバレーボール」「グランドソフトボール」「サウンドテーブルテニス」などの視覚障害者向けの種目の実施率が高く、障害種別による違いがみられた。一方で、今後必要とするスポーツ用具については、特定の障害を対象とした種目に限らず、肢体不自由(単置)の「ゴールボール用具」「サウンドテーブルテニス用具」のように、障害の枠を越えて児童生徒のニーズに合った用具を必要としていることが明らかとなった。【図表 2-25、2-26、2-27、2-62】

約1割が外部指導者を導入し、多くが地域のスポーツ指導者による卓球、サッカー、バスケ指導

外部指導者を導入している学校は全体の約1割で、知的障害(単置)と聴覚障害(単置)で積極的に活用していた。外部指導者の経歴は、「日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導員以外の地域のスポーツ指導者(保護者を除く)」が約6割を占め、次いで「特別支援学校の元教員(退職者含む)」が約2割であった。指導率が高かった種目は「卓球」「サッカー(ブラインドサッカー含む)」「バスケットボール」であった。【図表 2-38、2-40、2-41】

児童生徒の障害の重度・重複化及び併置校の増加に伴い、部活動の実施形態も多様化

事例調査から、単置校においても、近年児童生徒の障害の重度・重複化が顕著であり、多くの児童生徒は複数の障害を併せ持っている。重度障害児・者に運動・スポーツの機会を提供するため、重度障害児・者のみで活動する運動部を設置する学校もあった。また、併置校では異なるニーズや障害をもつチームメンバーに対する配慮を身につけるため、複数障害と一緒に部活動を行う学校もあれば、接触などの安全面を考慮して活動場所を分けて実施する学校もあり、在籍する児童生徒の障害種と障害の程度によって、運動部活動の実施形態は様々であることが明らかとなった。

1. 調査概要

1. 1 調査目的

本調査は、全国の 1,302 の特別支援学校を対象に悉皆調査を行い、学校に関する基本情報、体育の授業以外でのスポーツ・レクリエーション活動、運動部活動やクラブ活動の状況、学校運動施設の開放状況や外部指導者の活用状況等、幼児児童生徒の学校でのスポーツ・レクリエーション活動に関する実態を整理・把握することで、今後の方策検討における基礎資料とすることを目的とする。

1. 2 調査対象

平成 28 年度全国特別支援学校一覧(2016 年 4 月 1 日現在)をもとに、全国の特別支援学校(1,302 校。分校、分教室を含む)を対象とした。

1. 3 調査協力

全国特別支援学校長会「みんな de スポーツ推進委員会」
日本体育大学 生涯スポーツ学研究室

【調査 1】質問紙調査

(1) 調査方法

記名式の質問紙調査
回答は郵送、電子メール、FAX で受け付けた。

(2) 調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- ・学校の基本情報(幼児児童生徒数、重度・重複障害者の在籍の有無、教員数など)
- ・部活動やクラブ活動の状況(実施種目、対外試合への参加、活動時間、卒業生の参加など)
- ・教職員、幼児児童生徒と障害者スポーツの関わり
- ・スポーツ施設の状況(施設の種類、開放状況など)
- ・児童生徒の自主的なスポーツ活動につなげるための配慮
- ・今後、重要だと考える取組
- ・保有している、今後必要としているスポーツ用具

(3) 回収結果

回収数は 1,166 校(回収率 89.6%)であった。

(4) 調査期間

2016 年 8 月 19 日～2016 年 9 月 16 日

【調査 2】事例調査(ヒアリング調査)

(1) 調査方法

特別支援学校における部活動・クラブ活動や外部指導者の導入状況、卒業後の運動・スポーツ活動状況を明らかにするために、担当者に対して聞き取り調査を実施し、5 件の特別支援学校の事例をまとめた。

(2) 調査対象

- ・大阪府立大阪北視覚支援学校
- ・山口県立防府総合支援学校
- ・鹿児島県立鹿児島養護学校
- ・広島県立尾道特別支援学校
- ・鳥取県立琴の浦高等特別支援学校

(3) 調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- ・部活動・クラブ活動(サークル活動含む)の実施状況
- ・重度障害児の運動・スポーツへの参加状況
- ・教職員の障害者スポーツとの関わり
- ・学校体育施設の開放状況
- ・障害児・者のスポーツ活動を推進するうえでの取組

(4) 調査期間

2016 年 12 月～2017 年 2 月

注) 調査結果(質問紙調査)内で用いる 2013 年度データは、笹川スポーツ財団「健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)」(平成 26 年 3 月)より引用している。

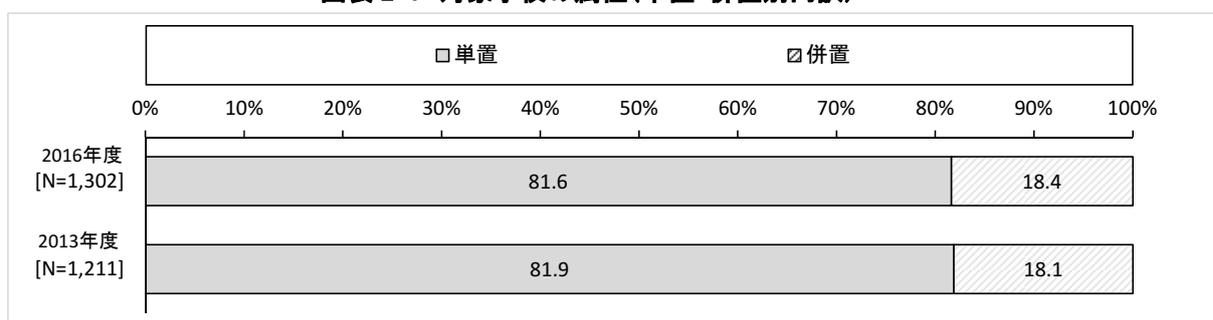
2. 調査結果(質問紙調査)

2.1 学校属性

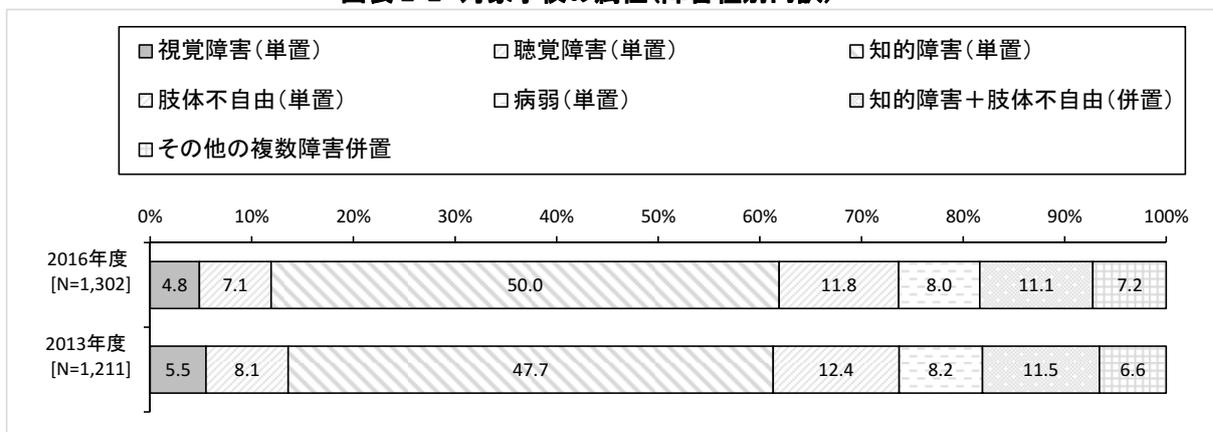
(1) 調査対象の属性

調査対象(母集団)の内訳は、主たる障害が単一の障害種に対応している学校(以下、単置校)が81.6%、主たる障害が複数の障害種に対応している学校(以下、併置校)が18.4%であった(図表 2-1)。障害種別では、「知的障害(単置)」が50.0%で最も多く、半数を占めていた。次いで「肢体不自由(単置)」(11.8%)、「知的障害+肢体不自由(併置)」(11.1%)であった(図表 2-2)。学校形態別では、「本校」が約8割を占め、「分校」(9.0%)、「分教室」(12.1%)がそれぞれ約1割であった(図表 2-3)。

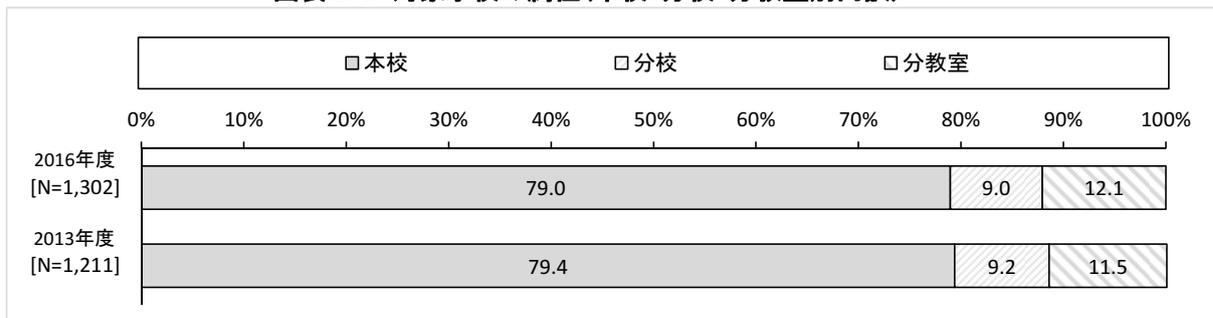
図表 2-1 対象学校の属性(単置・併置別内訳)



図表 2-2 対象学校の属性(障害種別内訳)



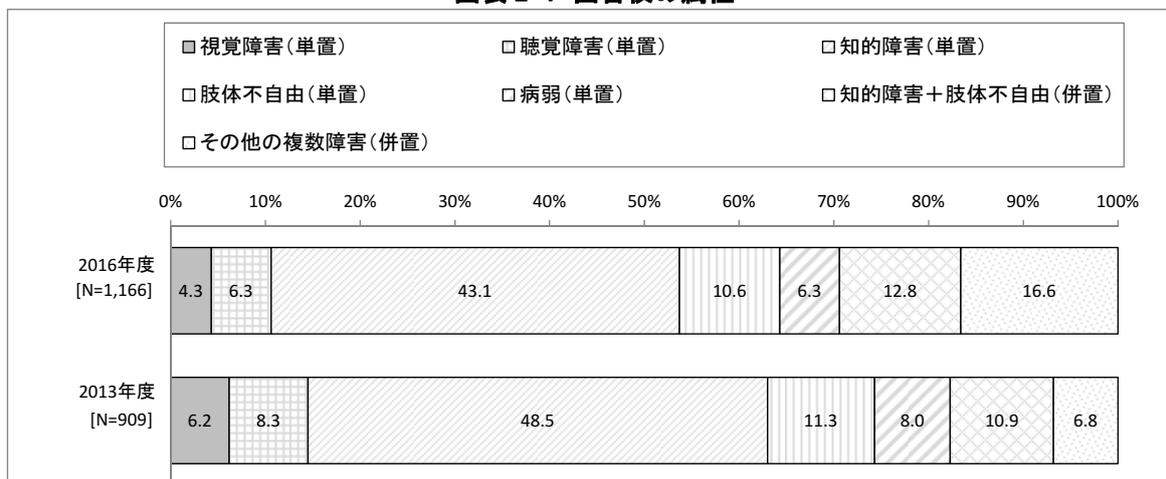
図表 2-3 対象学校の属性(本校・分校・分教室別内訳)



(2) 回答した学校の属性

回答した学校の属性は、「知的障害(単置)」が最も多く 43.1%で、次いで「その他の複数障害(併置)」が 16.6%であった。2013 年度調査と比較して、2 種以上の障害種が在籍する併置校(「知的障害+肢体不自由(併置)」 「その他の複数障害(併置)」)による回答が増えていることから、幼児児童生徒の障害が重度・重複化している傾向がうかがえる(図表 2-4、2-5)。

図表 2-4 回答校の属性



注) 障害種別別に回答した 2016 年 8 月現在の在籍幼児児童生徒数に基づいて分類した。

図表 2-5 回答した併置校の詳細

学校の属性	障害種数	併置校の種類	2016年度		2013年度	
			N	%	N	%
知的障害+肢体不自由(併置)	2障害	知的障害・肢体不自由	149	12.8	99	10.9
		合計	193	16.6	62	6.8
その他の複数障害(併置)	2障害	視覚障害・知的障害	7	0.6	1	0.1
		視覚障害・病弱	1	0.1	2	0.2
		視覚障害・肢体不自由	-	-	1	0.1
		聴覚障害・知的障害	17	1.5	7	0.8
		聴覚障害・肢体不自由	2	0.2	-	-
		知的障害・病弱	15	1.3	8	0.9
		肢体不自由・病弱	22	1.9	14	1.5
	3障害	視覚障害・聴覚障害・知的障害	1	0.1	-	-
		視覚障害・聴覚障害・肢体不自由	1	0.1	-	-
		視覚障害・知的障害・肢体不自由	9	0.8	-	-
		視覚障害・肢体不自由・病弱	1	0.1	-	-
		聴覚障害・知的障害・肢体不自由	8	0.7	1	0.1
		聴覚障害・知的障害・病弱	2	0.2	-	-
	4障害	知的障害・肢体不自由・病弱	35	3.0	12	1.3
		視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由	9	0.8	-	-
		視覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱	8	0.7	-	-
		聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱	21	1.8	1	0.1
5障害	視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱	34	2.9	15	1.7	

また、学部タイプ別にみると、「小学部・中学部・高等部普通科」がある学校が52.0%と最も多く、次いで「高等部普通科のみ」(9.4%)、「小学部・中学部」(9.0%)、「高等部職業学科のみ」(4.7%)であった(図表2-6)。

図表 2-6 回答校の学部タイプ

[N=1,116]

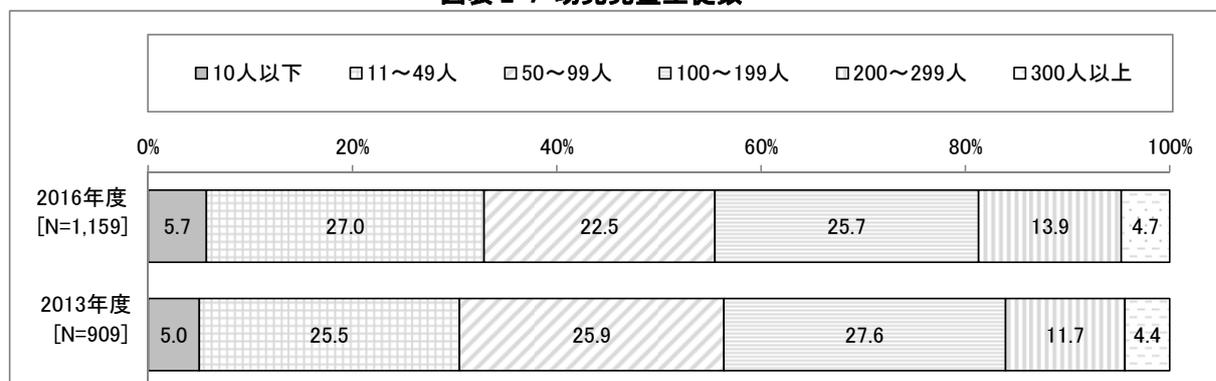
学部タイプ	%	学部タイプ	%
小学部・中学部・高等部普通科	52.0	幼稚部・小学部	1.0
高等部普通科のみ	9.4	小学部・中学部・高等部普通科・高等部職業学科・高等部専攻科	1.0
小学部・中学部	9.0	小学部・中学部・高等部普通科・高等部専攻科	0.9
高等部職業学科のみ	4.7	幼稚部・小学部・中学部・高等部職業学科	0.6
幼稚部・小学部・中学部・高等部普通科	3.9	中学部のみ	0.4
幼稚部・小学部・中学部・高等部普通科・高等部職業学科・高等部専攻科	2.7	小学部・高等部普通科	0.4
幼稚部・小学部・中学部	2.4	高等部普通科・高等部専攻科	0.4
小学部のみ	1.9	幼稚部のみ	0.3
幼稚部・小学部・中学部・高等部普通科・高等部専攻科	1.8	高等部普通科・高等部職業学科・高等部専攻科	0.3
小学部・中学部・高等部普通科・高等部職業学科	1.4	幼稚部・小学部・中学部・高等部職業学科・高等部専攻科	0.3
中学部・高等部普通科	1.2	中学部・高等部普通科・高等部専攻科	0.2
幼稚部・小学部・中学部・高等部普通科・高等部職業学科	1.2	中学部・高等部職業学科	0.1
高等部普通科・高等部職業学科	1.1	幼稚部・小学部・中学部・高等部専攻科	0.1
小学部・中学部・高等部職業学科	1.1	中学部・高等部普通科・高等部職業学科・高等部専攻科	0.1

注)学部別に回答した2016年8月現在の在籍幼児児童生徒数に基づいて分類したため、幼児児童生徒が在籍しない学部は含まれていない可能性がある。

(3) 幼児児童生徒数

2016年8月1日現在の幼児児童生徒総数は、「11～49人」が27.0%と最も多く、次いで、「100～199人」(25.7%)、「50～99人」(22.5%)と、100人未満の学校が過半数を占めた(図表2-7)。

図表 2-7 幼児児童生徒数



障害種別では、「視覚障害(単置)」と「病弱(単置)」の大半が、幼児児童生徒数 100 人未満であった。200 人以上の幼児児童生徒が在籍する学校が多かったのは、「知的障害(単置)」と「知的障害+肢体不自由(併置)」であった(図表 2-8)。

図表 2-8 幼児児童生徒数(障害種別内訳)

	視覚障害 (単置) [N=50]		聴覚障害 (単置) [N=73]		知的障害 (単置) [N=503]		肢体不自由 (単置) [N=124]		病弱 (単置) [N=67]		知的障害+ 肢体不自由 (併置) [N=149]		その他の 複数障害 (併置) [N=193]	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
10人以下	2	4.0	5	6.8	27	5.4	13	10.5	16	23.9	2	1.3	1	0.5
11~49人	36	72.0	31	42.5	112	22.3	34	27.4	38	56.7	23	15.4	41	21.2
50~99人	9	18.0	23	31.5	101	20.1	33	26.6	11	16.4	28	18.8	57	29.5
100~199人	3	6.0	13	17.8	136	27.0	38	30.6	2	3.0	47	31.5	60	31.1
200~299人	-	-	1	1.4	94	18.7	6	4.8	-	-	34	22.8	27	14.0
300人以上	-	-	-	-	33	6.6	-	-	-	-	15	10.1	7	3.6

学部別では、「小学部」、「中学部」、「高等部普通科」において、幼児児童生徒数「11~49人」が最も多く、それぞれ 46.9%(443 校)、54.1%(503 校)、43.4%(394 校)であった。対して、幼児児童生徒数「10 人以下」は、「幼稚部」が 69.9%(116 校)、「高等部職業学科」が 32.9%(56 校)、「高等部専攻科」が 49.5%(45 校)であった(図表 2-9)。

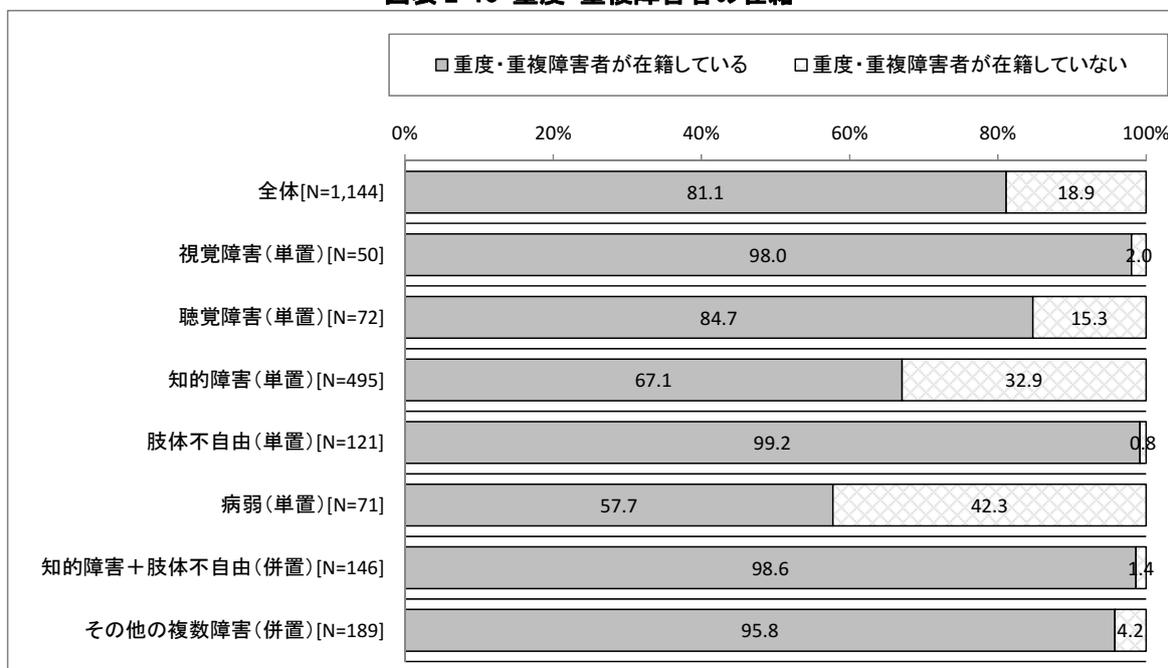
図表 2-9 幼児児童生徒数(学部別内訳)

	幼稚部 [N=166]		小学部 [N=945]		中学部 [N=929]		高等部普通科 [N=907]		高等部職業学科 [N=170]		高等部専攻科 [N=91]	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
10人以下	116	69.9	197	20.8	222	23.9	120	13.2	56	32.9	45	49.5
11~49人	49	29.5	443	46.9	503	54.1	394	43.4	45	26.5	41	45.1
50~99人	1	0.6	237	25.1	187	20.1	217	23.9	32	18.8	3	3.3
100~199人	-	-	68	7.2	17	1.8	162	17.9	31	18.2	1	1.1
200~299人	-	-	-	-	-	-	14	1.5	6	3.5	1	1.1

(4) 重度・重複障害者の在籍

重度・重複障害者が在籍している学校は、全体の 81.1%であった。「視覚障害(単置)」、「肢体不自由(単置)」、「知的障害+肢体不自由(併置)」、「その他の複数障害(併置)」のほとんどの学校に重度・重複障害者が在籍していることが分かった(図表 2-10)。

図表 2-10 重度・重複障害者の在籍

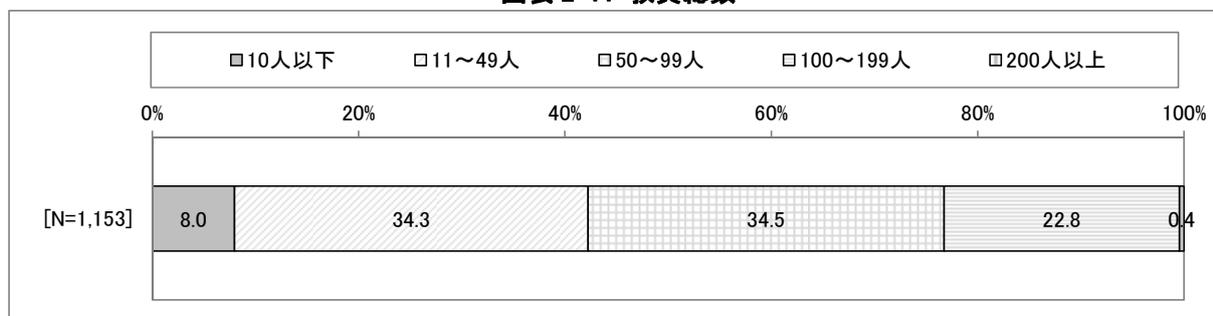


2. 2 教員の属性

(1) 教員の総数

2016年8月1日現在の教員総数は、「50～99人」が34.5%で最も多く、次いで「11～49人」(34.3%)、「100～199人」(22.8%)であった。また、「200人以上」(0.4%)と回答した学校の大半は児童生徒数が300人を超える学校であった(図表 2-11)。

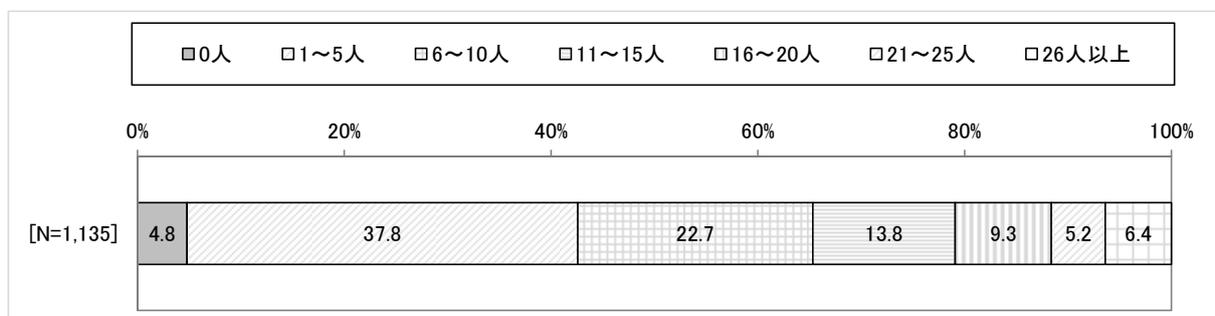
図表 2-11 教員総数



(2) 保健体育の教員

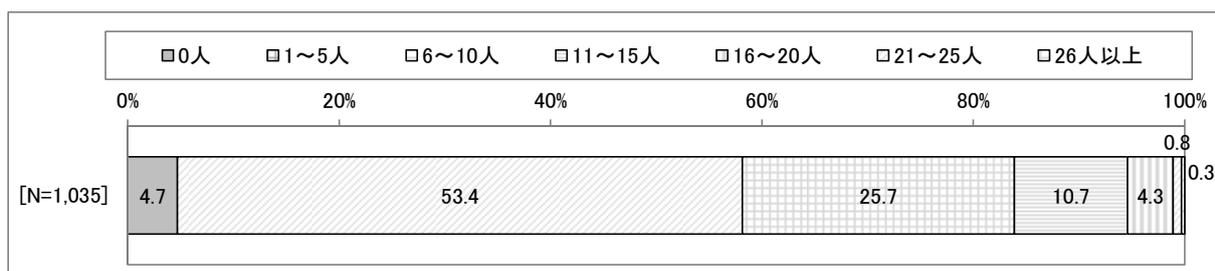
保健体育免許を保有する教員数は、「1～5人」が37.8%、「6～10人」が22.7%で、平均は9.4人であった(図表2-12)。

図表 2-12 保健体育免許を保有する教員数



保健体育免許を保有する教員のうち、特別支援学校教諭免許状を保有する教員は、「1～5人」が最も多く53.4%で、平均は5.8人であった(図表2-13)。

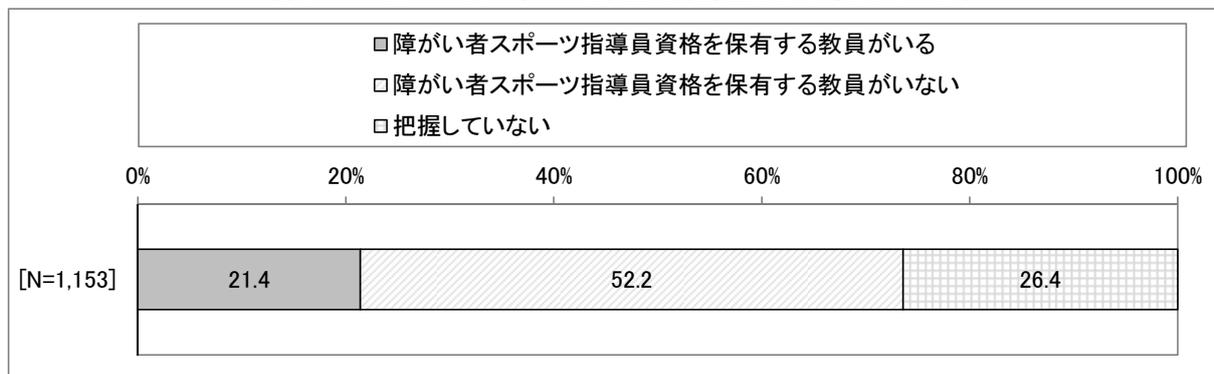
図表 2-13 保健体育免許と特別支援学校教諭免許状を保有する教員数



(3) 日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導員資格保持者

日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導員資格を保有する教員がいる学校は全体の21.4%で、そのうち61.2%の学校が有資格者は「1人」と回答した(図表 2-14、2-15)。その一方、「14人」と回答した学校が1校あった。なお、障がい者スポーツ指導員資格を保有する教員がいる学校のうち、運動・スポーツを「すべての人が指導をしている」と回答した学校が全体の約8割であった(図表 2-16)。

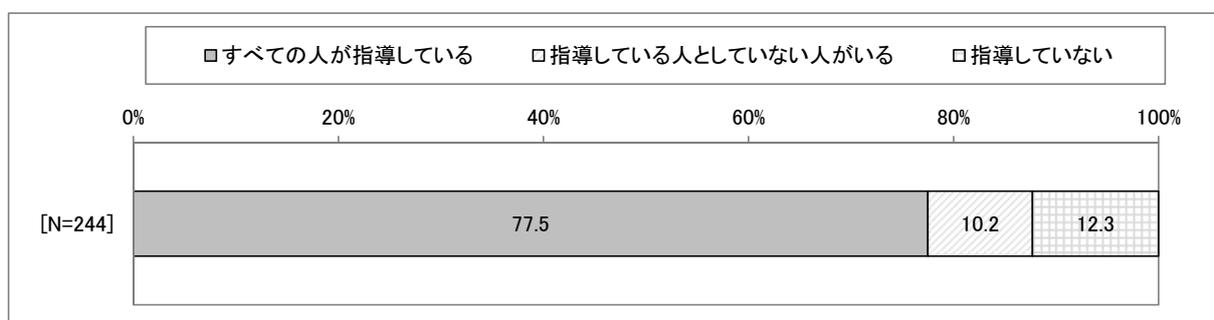
図表 2-14 障がい者スポーツ指導員資格を保有する教員の有無



図表 2-15 障がい者スポーツ指導員資格と保健体育免許を保有する教員数

指導員資格を保有する教員数			指導員資格と保健体育免許を保有する教員数		
[N=237]	N	%	[N=215]	N	%
1人	145	61.2	1人	126	58.6
2人	55	23.2	2人	37	17.2
3人	19	8.0	3人	6	2.8
4人	11	4.6	4人	6	2.8
5人	4	1.7	5人	1	0.5
6人	2	0.8	6人	1	0.5
14人	1	0.4			

図表 2-16 障がい者スポーツ指導員資格を保有する教員の運動・スポーツ指導実績



2. 3 体育の授業以外におけるスポーツの機会について

通常の体育の授業以外の活動(教育課程外を含む)については、校内で幼児児童生徒がスポーツをする機会として、「学校の運動会・体育祭」が91.1%と最も多く、次いで「運動部活動やクラブ活動(通年の活動)」(60.5%)、「学校のマラソン大会・駅伝大会」(46.0%)であった(図表 2-17)。

地域での活動における「その他の地域での活動」(5.7%)は、地域のスポーツクラブでの活動、自治体主催のマラソン大会への参加などであった。校内の活動や校外でのスポーツ大会への参加に比べて、地域でのスポーツを通じた交流が少ないことがうかがえる。

障害種別についてみると、「運動部活動やクラブ活動(通年の活動)」において、「肢体不自由(単置)」と「病弱(単置)」を除く全ての障害種で6割以上が実施していた。また、「特別支援学校体育連盟主催のスポーツ大会・体育大会への参加」においても、「肢体不自由(単置)」と「病弱(単置)」を除く全ての障害種で5割以上が参加していた。

図表 2-17 体育の授業以外におけるスポーツの機会(全体・障害種別)(複数回答)

		全体		視覚障害(単置)		聴覚障害(単置)		知的障害(単置)		肢体不自由(単置)		病弱(単置)		知的障害・肢体不自由(併置)		その他の複数障害(併置)		
		2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	
		N=1,140	N=876	N=50	N=56	N=74	N=74	N=501	N=439	N=120	N=95	N=57	N=54	N=148	N=98	N=190	N=60	
校内	1	学校の運動会・体育祭	91.1	-	92.0	-	97.3	-	90.4	-	85.8	-	89.5	-	91.9	-	93.7	-
	2	学校のマラソン大会・駅伝大会	46.0	-	40.0	-	63.5	-	54.9	-	4.2	-	8.8	-	50.0	-	51.6	-
	3	運動部活動やクラブ活動(通年の活動。下の選択肢4を除く)	60.5	60.8	76.0	80.4	87.8	90.5	62.7	61.0	29.2	29.5	31.6	29.6	65.5	70.4	64.7	66.7
	4	同じ敷地内の障害のない中高生の運動部活動への参加(通年参加。不定期の活動は除く)	1.8	0.9	0.0	1.8	2.7	0.0	2.8	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	1.7
	5	都道府県障害者スポーツ大会などのスポーツの大会に向けた期間限定の練習会(部活動は除く)	38.8	47.8	64.0	67.9	29.7	29.7	37.1	48.1	43.3	43.2	10.5	14.8	43.2	68.4	42.1	53.3
	6	夏休み等のプール指導(学校またはPTA等の主催)	34.7	49.5	20.0	37.5	35.1	39.2	39.1	56.3	40.8	51.6	15.8	18.5	30.4	53.1	32.1	43.3
校外	7	都道府県障害者スポーツ大会などのスポーツの大会への参加(部活動は除く)	49.3	56.4	68.0	71.4	43.2	50.0	47.5	57.2	48.3	50.5	8.8	18.5	59.5	72.4	56.3	61.7
	8	特別支援学校体育連盟主催のスポーツ大会・体育大会への参加	48.6	-	66.0	-	55.4	-	53.1	-	28.3	-	8.8	-	50.0	-	53.2	-
	9	移動教室や遠足、修学旅行等でのスポーツ	23.4	31.1	14.0	39.3	29.7	45.9	26.9	31.7	9.2	20.0	21.1	14.8	27.0	29.6	21.1	35.0
	10	公共のプールや障害者スポーツセンターなど、施設に出かけて行うスポーツ(部活動は除く)	24.8	29.3	28.0	33.9	27.0	24.3	25.9	28.9	18.3	26.3	15.8	27.8	26.4	33.7	25.8	33.3
	11	障害者スポーツ協会や自治体が主催するパラリンピック発掘事業への参加	8.9	-	10.0	-	13.5	-	7.4	-	6.7	-	1.8	-	8.1	-	14.7	-
地域	12	他の特別支援学校・学級とのスポーツを通じた交流(部活動は除く)	19.6	26.7	18.0	26.8	25.7	18.9	19.0	28.2	18.3	18.9	8.8	9.3	20.3	38.8	23.2	33.3
	13	近隣や同じ敷地内の障害のない幼小中高生とのスポーツを通じた交流	17.9	20.0	20.0	14.3	39.2	44.6	16.2	18.0	20.8	17.9	12.3	14.8	15.5	18.4	15.3	20
	14	近隣住民とのスポーツを通じた交流	10.6	11.0	4.0	7.1	16.2	17.6	9.8	12.5	12.5	4.2	8.8	9.3	16.9	10.2	6.8	8.3
	15	その他の地域での活動	5.7	5.9	4.0	8.9	5.4	6.8	6.6	5.7	5.8	8.4	1.8	3.7	7.4	5.1	3.7	3.3

注 1) 2013 年度調査と質問が異なるため、比較ができない項目もある。

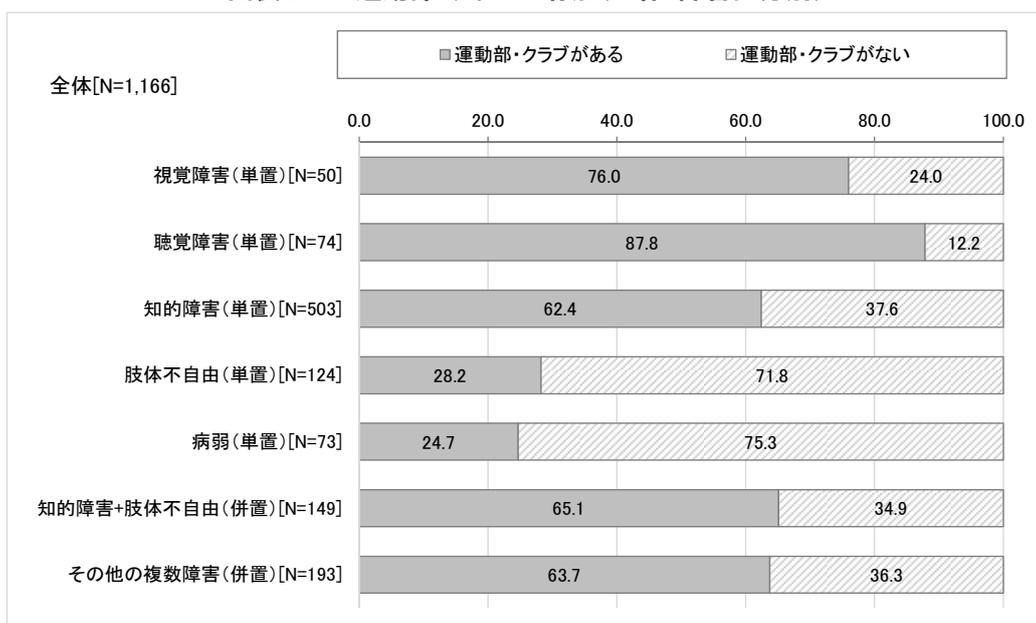
2. 4 運動部活動・クラブ活動

(1) 運動部・クラブの有無

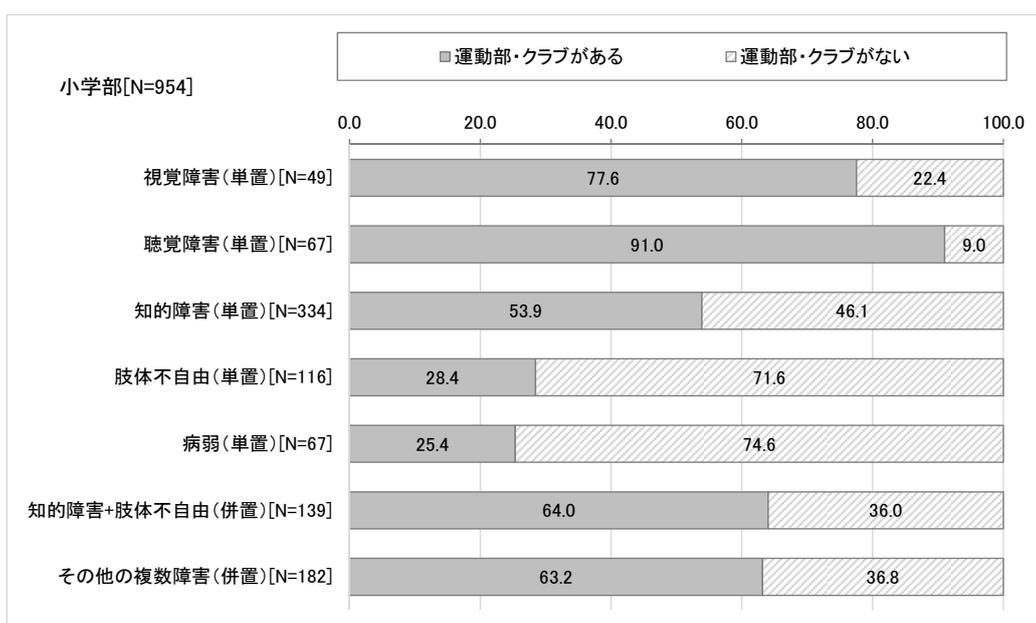
運動部やクラブがある学校は、「聴覚障害(単置)」が 87.8%で最も多く、次いで「視覚障害(単置)」が 76.0%であった。「肢体不自由(単置)」と「病弱(単置)」は 3 割以下であった(図表 2-18)。

学部別にみると、「高等部職業学科」では、「聴覚障害(単置)」「知的障害(単置)」「肢体不自由(単置)」「知的障害+肢体不自由(併置)」「その他の複数障害(併置)」で 9 割を超え、「視覚障害(単置)」も 83.3%で高かった(図表 2-22)。

図表 2-18 運動部・クラブの有無(全体・障害区分別)

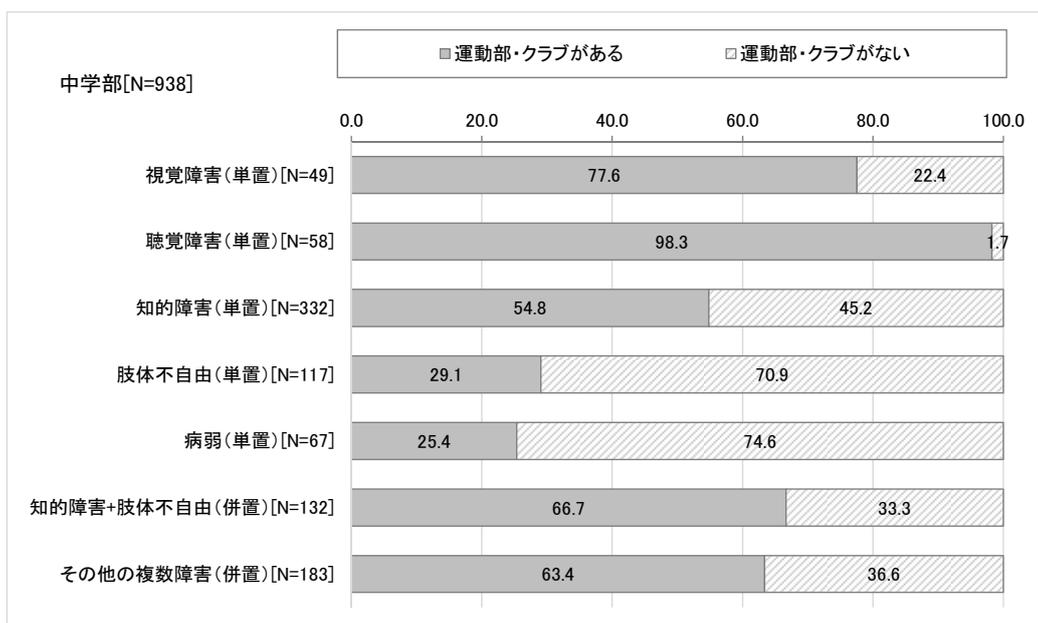


図表 2-19 運動部・クラブの有無(小学部・障害区分別)



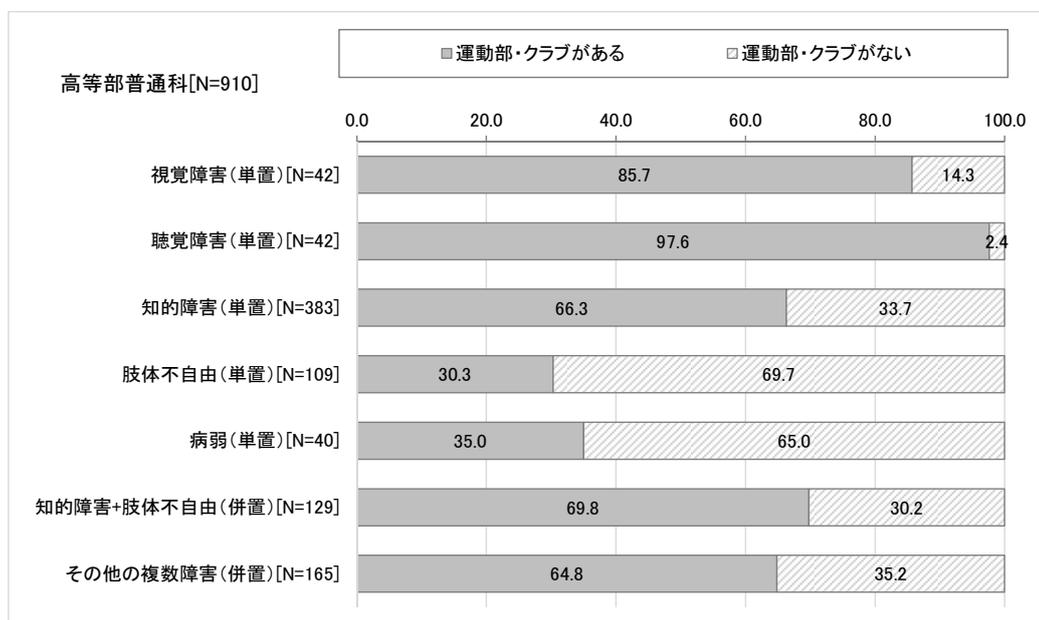
注1) 小学部設置校で、運動部・クラブ活動の質問に回答した学校を対象に集計した。

図表 2-20 運動部・クラブの有無(中学部・障害区分別)



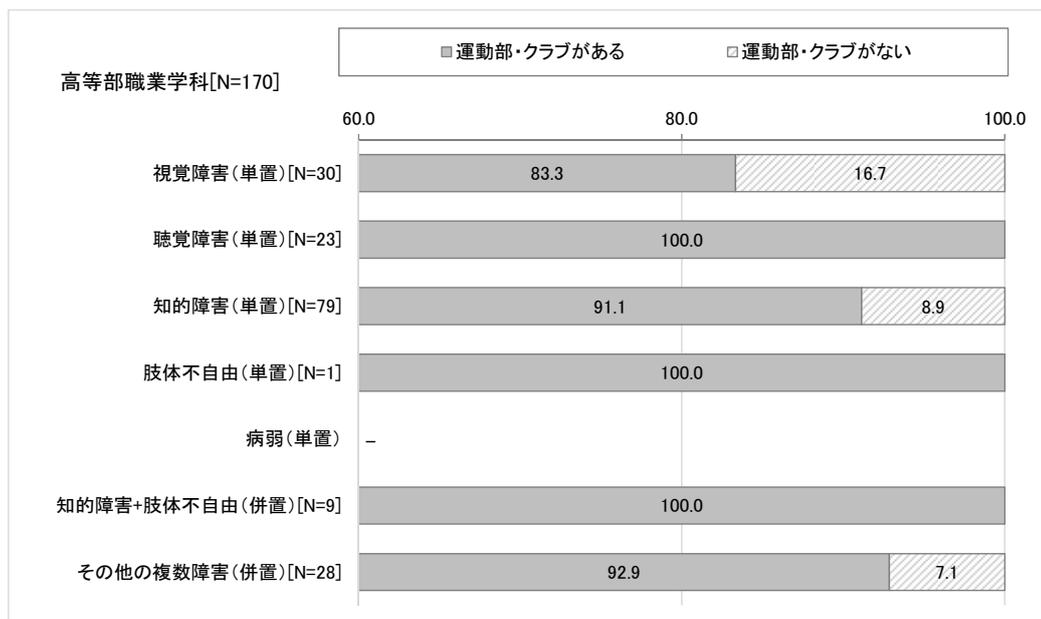
注1) 中学部設置校で、運動部・クラブ活動の質問に回答した学校を対象に集計した。

図表 2-21 運動部・クラブの有無(高等部普通科・障害区分別)



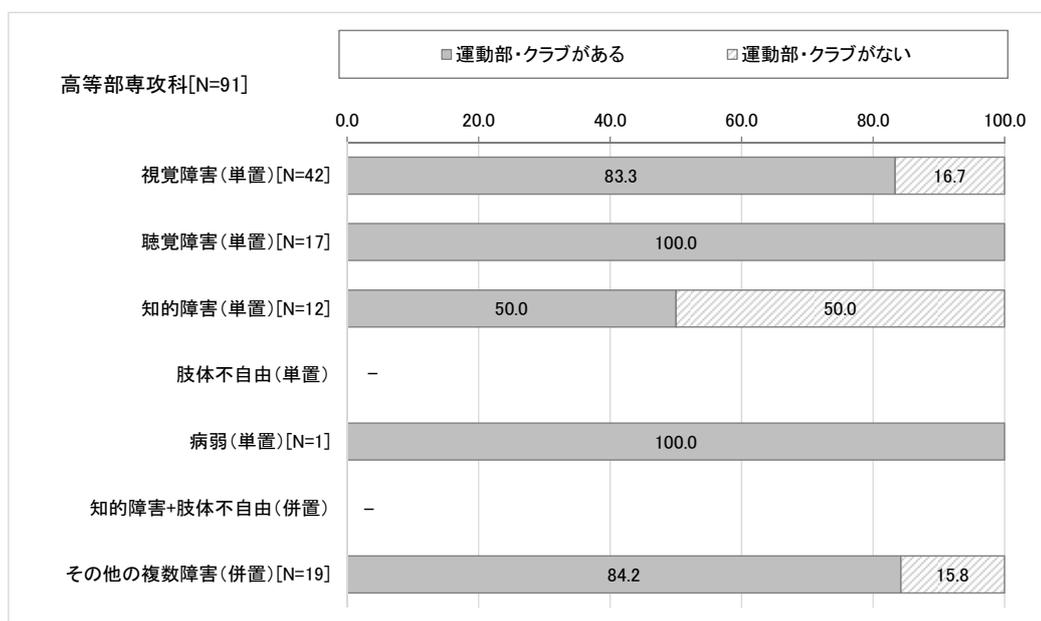
注1) 高等部普通科設置校で、運動部・クラブ活動の質問に回答した学校を対象に集計した。

図表 2-22 運動部・クラブの有無(高等部職業学科・障害区分別)



注1) 高等部職業学科設置校で、運動部・クラブ活動の質問に回答した学校を対象に集計した。

図表 2-23 運動部・クラブの有無(高等部専攻科・障害区分別)



注1) 高等部専攻科設置校で、運動部・クラブ活動の質問に回答した学校を対象に集計した。

運動部やクラブがある学校が1障害単独または複数の障害種が合同で活動しているかについてみると、運動部・クラブがある併置校(「知的障害+肢体不自由(併置)」 「その他の複数障害(併置)」)で1障害のみで活動している学校は151校あった。その一方、併置校(「知的障害+肢体不自由(併置)」 「その他の複数障害(併置)」)で、2種類の障害種が合同で実施している学校は47校で、3種類の障害種は11校、4種類の障害種が3校、5種類の障害種が2校あった(図表2-24)。

図表 2-24 障害区分別部活動・クラブの実施形態(複数回答)

実施形態	単置・併置	障害区分	校数
1障害のみ	単置校	視覚障害	38
		聴覚障害	65
		知的障害	466
		肢体不自由	34
		病弱	17
	併置校	知的障害+肢体不自由	151
		その他の複数障害	83
2障害	併置校	知的障害+肢体不自由	33
		知的障害+病弱	4
		肢体不自由+病弱	47
		視覚障害+知的障害	2
		聴覚障害+知的障害	5
3障害	併置校	視覚障害+聴覚障害+知的障害	1
		視覚障害+知的障害+肢体不自由	11
		知的障害+肢体不自由+病弱	9
4障害	併置校	聴覚障害+知的障害+肢体不自由+病弱	3
		視覚障害+知的障害+肢体不自由+病弱	1
5障害	併置校	視覚障害+聴覚障害+知的障害+肢体不自由+病弱	2

(2) 実施種目

運動部活動・クラブ活動の実施種目は、小学部から高等部を通じて、「陸上競技」「サッカー(ブラインドサッカー含む)」「卓球」を多く実施していた(図表 2-25、2-26)。実施種目の上位をみると、「小学部」では、「陸上競技」(40.0%)、「サッカー(ブラインドサッカー含む)」(35.0%)、「卓球」(30.0%)であった。「中学部」では、「陸上競技」(55.0%)が過半数を占め、次いで「卓球」(34.7%)、「サッカー(ブラインドサッカー含む)」(27.2%)であった。「高等部普通科」では、「陸上競技」(57.8%)が約 6 割であり、「サッカー(ブラインドサッカー含む)」(39.3%)と「バスケットボール」(38.9%)も約 4 割の学校で実施していた。「高等部職業学科」では、「陸上競技」(65.2%)が最も多く実施され、次いで「卓球」(56.3%)、「バスケットボール」(46.7%)であった。「高等部専攻科」では、「陸上競技」(52.7%)が過半数を占めたほか、「サウンドテーブルテニス」(47.3%)と「フロアバレーボール」(47.3%)が上位に入った。

障害種別にみると、「視覚障害のみ」では、「フロアバレーボール」「グランドソフトボール」「サウンドテーブルテニス」など、視覚障害者向けの種目が上位を占めた(図表 2-27)。同様に、「肢体不自由のみ」では、重度障害児・者でも実施できる種目である「ボッチャ」「ハンドサッカー」が上位にあがった(図表 2-30)。

一般校における実施種目の上位をみると、中学校における種目別の学校数・加盟校数(公益財団法人日本中学校体育連盟・2016 年度加盟校調査集計)では、男子は 1 位「軟式野球」、2 位「バスケットボール」、3 位「サッカー」、4 位「卓球」、5 位「陸上競技」、女子は 1 位「バレーボール」、2 位「バスケットボール」、3 位「ソフトテニス」、4 位「陸上競技」、5 位「卓球」であった。高校における種目別の学校数・加盟校数(公益財団法人全国高等学校体育連盟・2016 年度加盟登録状況／公益財団法人日本高等学校野球連盟・2016 年度加盟校数)では、男子は 1 位「バスケットボール」、2 位「陸上競技」、3 位「卓球」、4 位「サッカー」、5 位「硬式野球」、女子は 1 位「バレーボール」、2 位「バスケットボール」、3 位「陸上競技」、4 位「バドミントン」、5 位「卓球」であった。中学、高校で実施される上位種目には、一般校との差はほとんどみられなかった。

図表 2-25 運動部活動・クラブ活動の実施種目(小学部・中学部)(複数回答)

(%)

順位	小学部[N=60]		中学部[N=320]	
1位	陸上競技	40.0	陸上競技	55.0
2位	サッカー(ブラインドサッカー含む)	35.0	卓球	34.7
3位	卓球	30.0	サッカー(ブラインドサッカー含む)	27.2
4位	バドミントン	26.7	バスケットボール	21.9
5位	バスケットボール	23.3	バドミントン	18.1
6位	ドッジボール	16.7	フライングディスク	16.9
7位	バレーボール(ソフト含む)		野球(ティーボール含む)	10.6
8位	ポッチャ		フロアバレーボール	10.0
9位	ハンドサッカー	11.7	サウンドテーブルテニス	9.4
10位	ソフトボール	10.0	水泳	9.1
11位	フライングディスク		バレーボール(ソフト含む)	
12位	ボウリング		ポッチャ	8.8
13位	フロアバレーボール	8.3	ソフトボール	6.6
14位	野球(ティーボール含む)		グラウンドソフトボール	6.3
15位	グラウンドソフトボール	6.7	ふうせんバレーボール	
16位	水泳		ハンドサッカー	
17位	ふうせんバレーボール		ドッジボール	5.0
18位	フットベースボール		テニス	3.8
19位	サウンドテーブルテニス		5.0	卓球/バレー
20位	テニス	フットベースボール		

注1) 運動部・クラブがある学校のうち、実施種目の質問に回答した学校を対象に集計。

注2) 学部別に分かれて実施している学校と複数の学部が合同で実施している学校の実施種目を合わせて集計。

図表 2-26 運動部活動・クラブ活動の実施種目
(高等部普通科・高等部職業学科・高等部専攻科)(複数回答)

(%)

順位	高等部普通科[N=545]		高等部職業学科[N=135]		高等部専攻科[N=55]	
1位	陸上競技	57.8	陸上競技	65.2	陸上競技	52.7
2位	サッカー(ブラインドサッカー含む)	39.3	卓球	56.3	サウンドテーブルテニス	47.3
3位	バスケットボール	38.9	バスケットボール	46.7	フロアバレーボール	
4位	卓球	28.1	サッカー(ブラインドサッカー含む)	43.7	卓球	38.2
5位	フライングディスク	16.9	バドミントン	26.7	グランドソフトボール	36.4
6位	バドミントン	14.7	バレーボール(ソフト含む)	17.0	バレーボール(ソフト含む)	18.2
7位	野球(ティーボール含む)	10.8	ソフトボール	14.1	ゴールボール	12.7
8位	ソフトボール	9.9	フロアバレーボール	12.6	水泳	
9位	バレーボール(ソフト含む)	9.5	野球(ティーボール含む)		9.6	サッカー(ブラインドサッカー含む)
10位	ポッチャ	8.4	テニス	9.6	柔道	
11位	サウンドテーブルテニス	5.9	グランドソフトボール	8.9	野球(ティーボール含む)	7.3
12位	水泳	5.7	サウンドテーブルテニス		5.5	
13位	フロアバレーボール	5.3	フライングディスク	7.4	車いすテニス	3.6
14位	フットベースボール	5.0	水泳	6.7	テニス	
15位	グランドソフトボール	4.4	フットベースボール	5.9	バドミントン	
16位	テニス	4.0	ドッジボール	3.0	ボウリング	
17位	ふうせんバレーボール	3.9	ゴールボール	1.5	卓球バレー	1.8
18位	ハンドサッカー	3.7	柔道		ふうせんバレーボール	
19位	卓球バレー	3.3	卓球バレー			
20位	ドッジボール	3.1	ふうせんバレーボール			

注1) 運動部・クラブがある学校のうち、実施種目の質問に回答した学校を対象に集計。

注2) 学部別に分かれて実施している学校と複数の学部が合同で実施している学校の実施種目を合わせて集計。

図表 2-27 運動部活動・クラブ活動の実施種目(視覚障害のみ・複数回答)

(%)

順位	中学部[N=41]		高等部普通科[N=40]		高等部職業学科[N=22]		高等部専攻科[N=37]	
1位	フロアバレーボール	70.7	サウンドテーブルテニス	70.0	フロアバレーボール	77.3	サウンドテーブルテニス	70.3
2位	サウンドテーブルテニス	63.4	フロアバレーボール	67.5	グランドソフトボール	54.5	フロアバレーボール	
3位	陸上競技	48.8	グランドソフトボール	52.5	サウンドテーブルテニス		グランドソフトボール	54.1
4位	グランドソフトボール	43.9	陸上競技	45.0	陸上競技	36.4	陸上競技	40.5
5位	水泳	22.0	ゴールボール	17.5	水泳	18.2	ゴールボール	18.9
6位	ゴールボール	17.1	水泳		ゴールボール	9.1	水泳	
7位	卓球		卓球		柔道		柔道	16.2
8位	柔道	12.2	柔道	15.0	卓球		卓球	
9位	サッカー(ブラインドサッカー含む)	4.9	車いすテニス	5.0	車いすテニス	4.5	車いすテニス	5.4
10位	ボウリング	4.9	サッカー(ブラインドサッカー含む)		ボウリング		ボウリング	

注1) N数が10以下の学部は省略。

注2) 学部別に分かれて実施している学校と複数の学部が合同で実施している学校の実施種目を合わせて集計。

注3) 視覚障害のみ:運動部活動・クラブ活動を視覚障害のみで実施。

図表 2-28 運動部活動・クラブ活動の実施種目(聴覚障害のみ・複数回答)

(%)

順位	小学部[N=17]		中学部[N=71]		高等部普通科[N=48]		高等部職業学科[N=20]		高等部専攻科[N=14]	
1位	卓球	58.8	陸上競技	73.2	陸上競技	87.5	陸上競技	88.5	卓球	92.9
2位	陸上競技	52.9	卓球	70.4	卓球	85.4	卓球	84.6	陸上競技	
3位	バドミントン	41.2	バドミントン	29.6	バレーボール(ソフト含む)	37.5	バレーボール(ソフト含む)	34.6	バレーボール(ソフト含む)	57.1
4位	サッカー(ブラインドサッカー含む)	35.3	バレーボール(ソフト含む)	28.2	バドミントン	22.9	バドミントン	30.8	サッカー(ブラインドサッカー含む)	21.4
5位	バレーボール(ソフト含む)		野球(ティーボール含む)	15.5	野球(ティーボール含む)	20.8	サッカー(ブラインドサッカー含む)	19.2	野球(ティーボール含む)	
6位	バスケットボール	29.4	サッカー(ブラインドサッカー含む)	11.3	サッカー(ブラインドサッカー含む)	10.4	野球(ティーボール含む)	15.4	テニス	14.3
7位	ドッジボール	17.6	バスケットボール	8.5	バスケットボール		テニス	11.5	バドミントン	
8位	水泳	5.9	フライングディスク	4.2	テニス	8.3	バスケットボール		フライングディスク	7.1
9位	ソフトボール		水泳	2.8	フライングディスク	6.3	ドッジボール	卓球バレー		
10位	フットベースボール		ドッジボール		ドッジボール	4.2	フライングディスク			

注1) 学部別に分かれて実施している学校と複数の学部が合同で実施している学校の実施種目を合わせて集計。

注2) 聴覚障害のみ:運動部活動・クラブ活動を聴覚障害のみで実施。

図表 2-29 運動部活動・クラブ活動の実施種目(知的障害のみ・複数回答)

(%)

順位	小学部[N=14]		中学部[N=124]		高等部普通科[N=356]		高等部職業学科[N=79]	
1位	サッカー(ブラインドサッカー含む)	42.9	サッカー(ブラインドサッカー含む)	50.0	陸上競技	57.6	バスケットボール	74.7
2位	バスケットボール		陸上競技		サッカー(ブラインドサッカー含む)	51.4	陸上競技	68.4
3位	陸上競技	35.7	バスケットボール	38.7	バスケットボール	51.1	サッカー(ブラインドサッカー含む)	64.6
4位	フライングディスク	28.6	卓球	29.0	卓球	22.8	卓球	57.0
5位	ソフトボール	21.4	フライングディスク	27.4	フライングディスク	19.1	バドミントン	34.2
6位	卓球		バドミントン	16.1	バドミントン	14.3	ソフトボール	20.3
7位	バドミントン		ソフトボール	10.5	ソフトボール	11.8	バレーボール(ソフト含む)	16.5
8位	ドッジボール	14.3	水泳	9.7	野球(ティーボール含む)	9.0	野球(ティーボール含む)	15.2
9位	フットベースボール		ドッジボール	8.9	バレーボール(ソフト含む)	7.3	テニス	12.7
10位	野球(ティーボール含む)		野球(ティーボール含む)	8.1	フットベースボール	6.7	フライングディスク	10.1

注1) N数が10以下の学部は省略。

注2) 学部別に分かれて実施している学校と複数の学部が合同で実施している学校の実施種目を合わせて集計。

注3) 知的障害のみ: 運動部活動・クラブ活動を知的障害のみで実施。

図表 2-30 運動部活動・クラブ活動の実施種目(肢体不自由のみ・複数回答)

(%)

順位	小学部[N=13]		中学部[N=36]		高等部普通科[N=38]	
1位	ハンドサッカー	53.8	ポッチャ	58.3	ポッチャ	55.3
2位	ポッチャ		陸上競技	52.8	陸上競技	50.0
3位	陸上競技	30.8	ハンドサッカー	41.7	ハンドサッカー	42.1
4位	ボウリング	23.1	フライングディスク	16.7	フライングディスク	18.4
5位	サッカー(ブラインドサッカー含む)	15.4	ふうせんバレーボール	13.9	卓球バレー	15.8
6位	剣道	7.7	卓球バレー	11.1	ふうせんバレーボール	13.2
7位	水泳		野球(ティーボール含む)		野球(ティーボール含む)	
8位	バスケットボール		ボウリング	8.3	車椅子バスケットボール	7.9
9位	ふうせんバレーボール		車椅子バスケットボール	5.6	卓球	
10位		卓球			サッカー(ブラインドサッカー含む)	5.3

注1) N数が10以下の学部は省略。

注2) 学部別に分かれて実施している学校と複数の学部が合同で実施している学校の実施種目を合わせて集計。

注3) 肢体不自由のみ: 運動部活動・クラブ活動を肢体不自由のみで実施。

図表 2-31 運動部活動・クラブ活動の実施種目(病弱のみ・複数回答)

(%)

順位	中学部[N=16]		高等部普通科[N=14]	
1位	バドミントン	50.0	バドミントン	50.0
2位	テニス	37.5	サッカー(ブラインドサッカー含む)	35.7
3位	サッカー(ブラインドサッカー含む)	31.3	テニス	
4位	卓球			フライングディスク
5位	バスケットボール	25.0	卓球	21.4
6位	陸上競技	18.8	ドッジボール	
7位	ソフトボール	12.5	バスケットボール	
8位	ドッジボール		バレーボール(ソフト含む)	
9位	バレーボール(ソフト含む)		ソフトボール	14.3
9位	フライングディスク		ふうせんバレーボール	
10位	野球(ティーボール含む)		野球(ティーボール含む)	
			陸上競技	

注1) N数が10以下の学部は省略。

注2) 学部別に分かれて実施している学校と複数の学部が合同で実施している学校の実施種目を合わせて集計。

注3) 病弱のみ: 運動部活動・クラブ活動を病弱のみで実施。

図表 2-32 運動部活動・クラブ活動の実施種目(知的障害と肢体不自由が合同・複数回答)

(%)

順位	中学部[N=13]		高等部普通科[N=27]	
1位	陸上競技	76.9	陸上競技	66.7
2位	サッカー(ブラインドサッカー含む)	38.5	バスケットボール	44.4
3位	卓球	30.8	サッカー(ブラインドサッカー含む)	40.7
4位	野球(ティーボール含む)		卓球	
5位	ソフトボール	23.1	ソフトボール	29.6
6位	バスケットボール		野球(ティーボール含む)	25.9
7位	バドミントン		バドミントン	18.5
8位	フライングディスク		卓球バレー	14.8
9位	水泳	バレーボール(ソフト含む)		
10位	ボウリング	15.4	フライングディスク	

注1) N数が10以下の学部は省略。

注2) 学部別に分かれて実施している学校と複数の学部が合同で実施している学校の実施種目を合わせて集計。

図表 2-33 運動部活動・クラブ活動の実施種目(その他複数の障害種が合同・複数回答)

(%)

順位	中学部[N=19]		高等部普通科[N=22]	
	実施種目	割合	実施種目	割合
1位	陸上競技	52.6	陸上競技	50.0
2位	バスケットボール	42.1	バスケットボール	40.9
3位	卓球	36.8	卓球	31.8
4位	バドミントン	31.6	サッカー(ブラインドサッカー含む)	27.3
5位	フライングディスク	26.3	バドミントン	
6位	サッカー(ブラインドサッカー含む)	21.1	フライングディスク	22.7
7位	サウンドテーブルテニス	15.8	サウンドテーブルテニス	13.6
8位	ふうせんバレーボール		ふうせんバレーボール	
9位	ポッチャ		グランドソフトボール	9.1
10位	野球(ティーボール含む)		車椅子バスケットボール 水泳	

注1) N数が10以下の学部は省略。

注2) 学部別に分かれて実施している学校と複数の学部が合同で実施している学校の実施種目を合わせて集計。

(3) 活動時間

運動部活動・クラブ活動の活動時間は、「放課後(朝始業前含む)」が 94.3%、「長期休業期間(夏休み等)」が 59.4%、「休日(土日祝日)」が 37.1%であった(図表 2-34)。

障害種別にみると、「肢体不自由のみ」を除く全ての障害種で、「放課後(朝始業前含む)」が 9 割を超えていた。また、「肢体不自由のみ」では、「長期休業期間(夏休み等)」と比較して「休日(土日祝日)」の割合が高かった。「聴覚障害のみ」では、「休日(土日祝日)」「長期休業期間(夏休み等)」の割合が他の障害種と比べて高かった。

図表 2-34 運動部活動・クラブ活動の活動時間(全体・障害種別)(複数回答)

	(%)							
	全体	視覚障害のみ	聴覚障害のみ	知的障害のみ	肢体不自由のみ	病弱のみ	肢体不自由が合同知的障害と	その他が複数同
	N=688	N=47	N=74	N=437	N=43	N=21	N=33	N=30
放課後(朝始業前含む)	94.3	100.0	96.1	96.1	65.1	90.5	97.0	96.7
休日(土日祝日)	37.1	27.7	62.3	35.0	44.2	14.3	24.2	36.7
長期休業期間(夏休み等)	59.4	57.4	80.5	62.7	20.9	23.8	45.5	56.7
その他	5.2	2.1	5.2	4.6	11.6	14.3	3.0	6.7

注1) 運動部・クラブがある学校のうち、活動時間の質問に回答した学校を対象に集計。

注2) 視覚障害のみ: 運動部活動・クラブ活動を視覚障害のみで実施している。他の障害種についても同様。

注3) 小学部: 小学部設置校を指す。小学部単独または他の学部と合同で運動部活動・クラブ活動を実施。他の学部についても同様。

(4) 対外試合への参加

運動部活動・クラブ活動の対外試合への参加は、「高等部普通科」「高等部職業学科」「高等部専攻科」で8割を超えている(図表 2-35)。

障害種別にみると、「聴覚障害のみ」では、「中学部」「高等部普通科」「高等部職業学科」で9割を超えている。また、「知的障害のみ」では、「高等部普通科」が最も高く83.6%で、次いで「高等部職業学科」が81.0%であった。

図表 2-35 運動部活動・クラブ活動の対外試合への参加状況(全体／障害種別・学部別)(複数回答)

	小学部 [N=59]		中学部 [N=318]		高等部普通科 [N=542]		高等部職業学科 [N=135]		高等部専攻科 [N=55]	
	N	参加率 (%)	N	参加率 (%)	N	参加率 (%)	N	参加率 (%)	N	参加率 (%)
全体	59	50.8	318	78.3	542	82.1	135	85.2	55	89.1
視覚障害のみ	5	80.0	41	87.8	40	92.5	22	86.4	37	91.9
聴覚障害のみ	16	68.8	70	94.3	47	95.7	26	96.2	14	85.7
知的障害のみ	14	50.0	123	75.6	354	83.6	79	81.0	3	66.7
肢体不自由のみ	13	53.8	36	72.2	38	68.4	1	100.0	0	0.0
病弱のみ	7	0.0	16	50.0	14	50.0	0	0.0	0	0.0
知的障害と肢体不自由が合同	2	0.0	13	69.2	27	74.1	2	50.0	0	0.0
その他複数の障害種が合同	2	50.0	19	57.9	22	63.6	5	100.0	1	100.0

注1) 運動部・クラブがある学校のうち、対外試合への参加状況の質問に回答した学校を対象に集計。

注2) 視覚障害のみ:運動部活動・クラブ活動を視覚障害のみで実施している。他の障害種についても同様。

注3) 小学部:小学部設置校を指す。小学部単独または他の学部と合同で運動部活動・クラブ活動を実施。

他の学部についても同様。

(5) 卒業生の練習参加

運動部活動・クラブ活動への卒業生の練習参加は、「小学部」「中学部」「高等部普通科」が約3割、「高等部職業学科」「高等部専攻科」が約4割であった(図表 2-36)。

障害種別にみると、「聴覚障害のみ」では、「高等部普通科」が55.6%と最も高く、次いで「高等部職業学科」(52.0%)、「高等部専攻科」(50.0%)と続き、高等部の約半数の学校で運動部活動・クラブ活動が卒業生の運動・スポーツ活動の場になっていることがわかった。

図表 2-36 運動部活動・クラブ活動における卒業生の練習参加状況(全体・障害種別)

	小学部 [N=58]		中学部 [N=314]		高等部普通科 [N=539]		高等部職業学科 [N=134]		高等部専攻科 [N=55]	
	N	参加率 (%)	N	参加率 (%)	N	参加率 (%)	N	参加率 (%)	N	参加率 (%)
全体	58	31.0	314	33.8	539	32.7	134	42.5	55	40.0
視覚障害のみ	5	60.0	41	36.6	40	42.5	22	40.9	37	37.8
聴覚障害のみ	16	37.5	69	46.4	45	55.6	25	52.0	14	50.0
知的障害のみ	14	21.4	122	25.4	353	28.6	79	39.2	3	0.0
肢体不自由のみ	13	38.5	35	42.9	38	39.5	1	0.0	0	0.0
病弱のみ	7	14.3	16	25.0	14	28.6	0	0.0	0	0.0
知的障害と肢体不自由が合同	2	100.0	13	15.4	27	18.5	2	50.0	0	0.0
その他複数の障害種が合同	0	0.0	18	38.9	22	40.9	5	60.0	1	100.0

注1) 運動部・クラブがある学校のうち、卒業生の練習参加状況の質問に回答した学校を対象に集計。

注2) 視覚障害のみ:運動部活動・クラブ活動を視覚障害のみで実施している。他の障害種についても同様。

注3) 小学部:小学部設置校を指す。小学部単独または他の学部と合同で運動部活動・クラブ活動を実施。他の学部についても同様。

(6) 重度・重複障害者の参加

運動部活動・クラブ活動への重度・重複障害者の参加は、「小学部」「中学部」が約5割であったのに対して、「高等部普通科」は40.6%、「高等部職業学科」は34.8%であった(図表2-37)。

障害種別にみると、「肢体不自由のみ」の重度・重複障害者の参加は他の障害種と比較して高く、「小学部」では9割を超え、「中学部」は72.2%、「高等部普通科」では65.8%であった。「知的障害のみ」の重度・重複障害者の参加は他の障害種と比較して低かった。

図表 2-37 重度・重複障害者の参加(重度・重複障害者在籍校のみ)

	小学部 [N=57]		中学部 [N=313]		高等部普通科 [N=535]		高等部職業学科 [N=132]		高等部専攻科 [N=53]	
	N	参加率(%)	N	参加率(%)	N	参加率(%)	N	参加率(%)	N	参加率(%)
全体	57	52.6	313	52.4	535	40.6	132	34.8	53	62.3
視覚障害のみ	4	25.0	40	52.5	39	53.8	22	59.1	36	52.8
聴覚障害のみ	16	68.8	70	77.1	47	78.7	26	76.9	14	92.9
知的障害のみ	14	21.4	121	35.5	349	30.4	77	9.1	2	0.0
肢体不自由のみ	13	92.3	36	72.2	38	65.8	1	100.0	0	0
病弱のみ	7	28.6	16	12.5	14	21.4	0	0	0	0
知的障害と肢体不自由が合同	2	50.0	13	53.8	27	40.7	2	100.0	0	0
その他複数の障害種が合同	1	0.0	17	64.7	21	66.7	4	75.0	1	100.0

注1) 部活動・クラブ活動を実施している学校を対象に集計。

注2) 視覚障害のみ:運動部活動・クラブ活動を視覚障害単一で実施している。他の障害種についても同様。

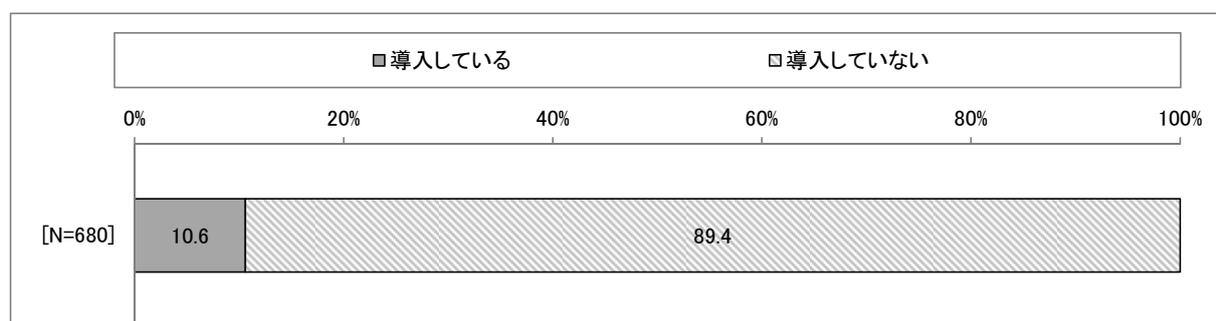
2. 5 外部指導者の導入

外部指導者の導入について、「導入している」学校は全体の約 1 割であった(図表 2-38)。約 9 割の学校では、教職員のみで部活動やクラブ活動を指導していると考えられる。

外部指導者を導入している学校を障害区別にみると、「知的障害(単置)」が 26 校と最も多く、次いで「聴覚障害(単置)」が 19 校であった(図表 2-39)。

外部指導者の経歴は、「日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導員以外の地域のスポーツ指導者(保護者を除く)」が最も多く約 6 割で、次いで「特別支援学校の元教員(退職者含む)」が約 2 割であった(図表 2-40)。また、外部指導者の指導種目は、「卓球」(39.4%)が最も多く、次いで「サッカー(ブラインドサッカー含む)」(16.9%)、「バスケットボール」(14.1%)であった(図表 2-41)。

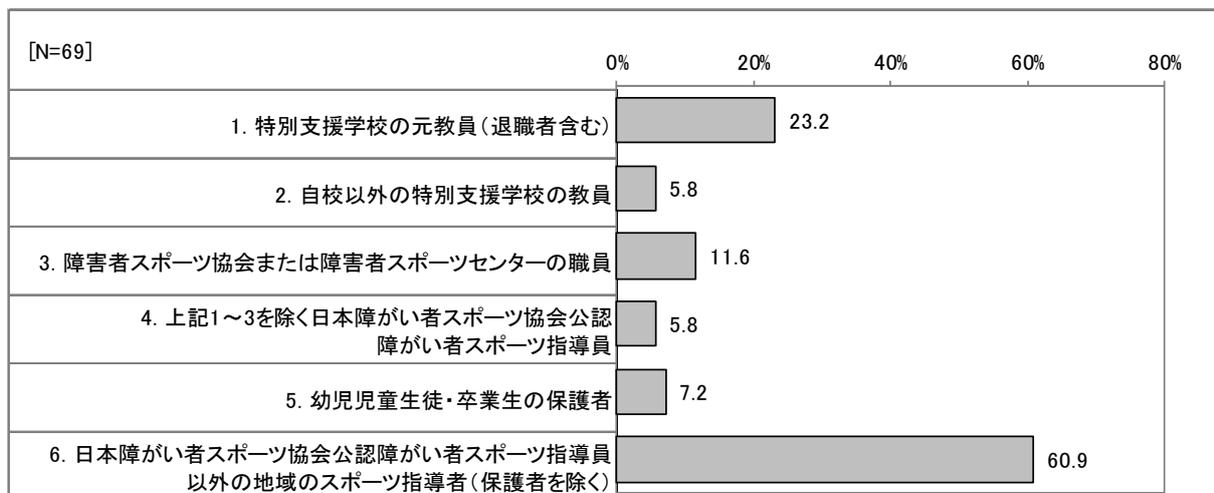
図表 2-38 外部指導者の導入有無



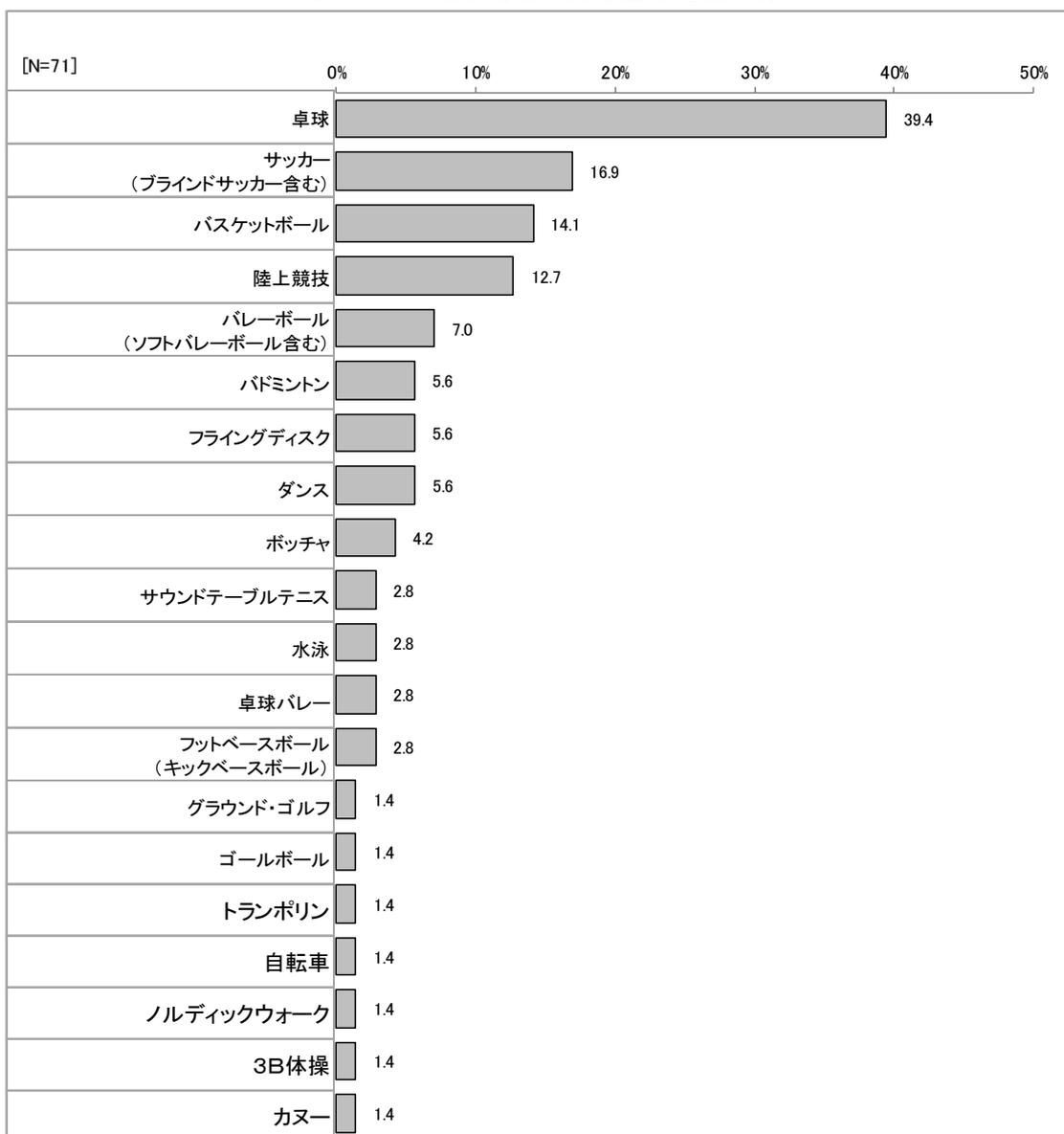
図表 2-39 外部指導者を導入している学校(障害区分)

障害区分	N=72
視覚障害(単置)	5
聴覚障害(単置)	19
知的障害(単置)	26
肢体不自由(単置)	3
病弱(単置)	1
知的障害・肢体不自由(併置)	7
その他の複数障害(併置)	11

図表 2-40 外部指導者の経歴(複数回答)



図表 2-41 外部指導者の指導種目(複数回答)



2. 6 教職員や幼児児童生徒と障害者スポーツとの関わり

教職員や幼児児童生徒と障害者スポーツとの関わりについてみると、「教職員が都道府県の障害者スポーツ大会や種目別のブロック大会・県大会などの運営に関わっている(いた)」と「教職員が特別支援学校体育連盟が主催する大会の運営に関わっている(いた)」が約 5 割、「教職員が障害者スポーツの競技団体の運営に関わっている(いた)」が約 3 割であった(図表 2-42)。

障害種別にみると、「視覚障害(単置)」において、「教職員が都道府県の障害者スポーツ大会や種目別のブロック大会・県大会などの運営に関わっている(いた)」と「教職員が特別支援学校体育連盟が主催する大会の運営に関わっている(いた)」が 7 割を超えている。

図表 2-42 教職員や幼児児童生徒と障害者スポーツとの関わり(全体・障害種別・複数回答)

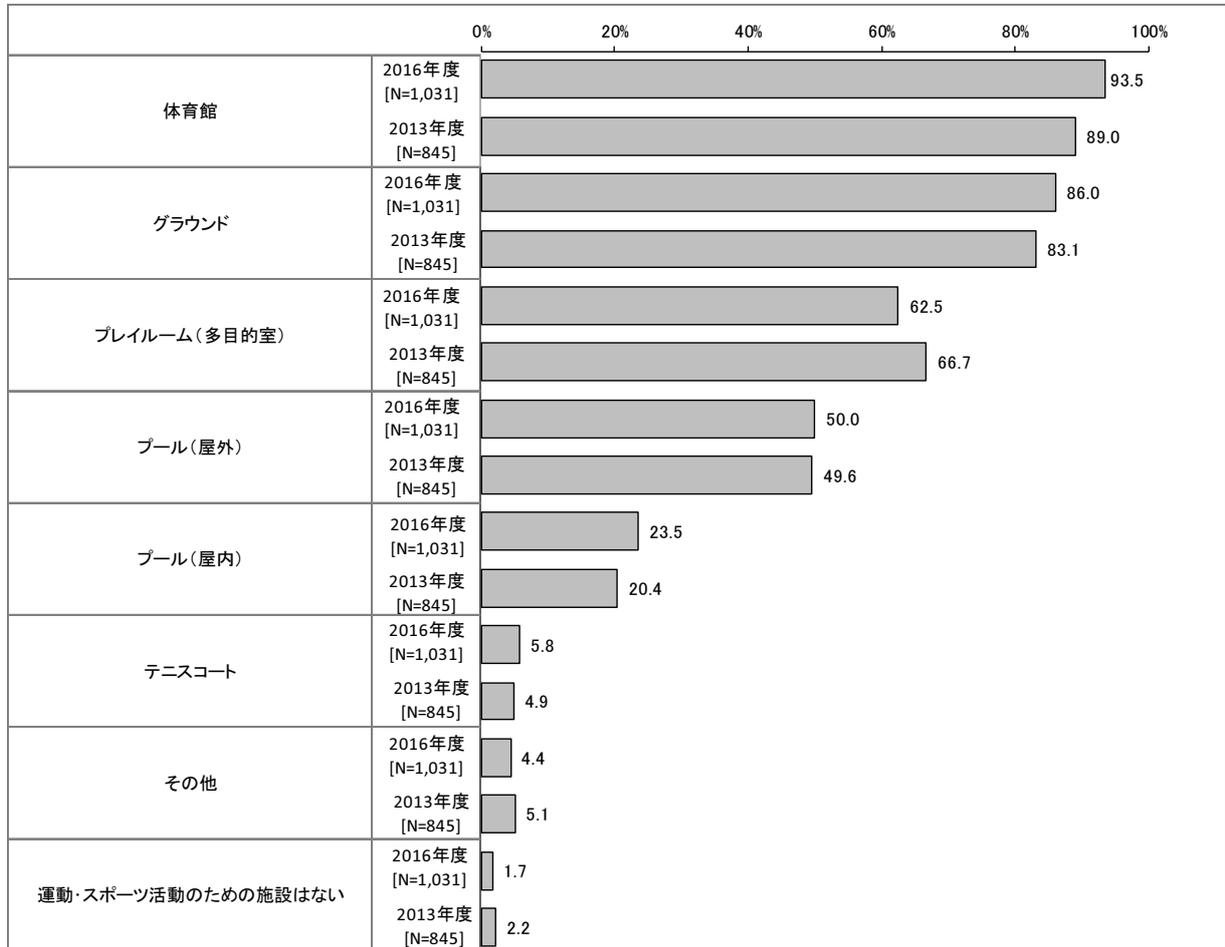
	全体		視覚障害(単置)		聴覚障害(単置)		知的障害(単置)		肢体不自由(単置)		病弱(単置)		知的障害・肢体不自由(併置)		その他の複数障害(併置)	
	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年
	N=1,050	N=909	N=50	N=56	N=74	N=75	N=503	N=441	N=124	N=103	N=73	N=73	N=149	N=99	N=193	N=62
教職員が都道府県の障害者スポーツ大会や種目別のブロック大会・県大会などの運営に関わっている(いた)	51.5	47.1	74.0	51.8	41.9	42.7	49.1	52.6	39.5	38.8	17.8	23.3	50.3	54.5	46.1	38.7
教職員が特別支援学校体育連盟が主催する大会の運営に関わっている(いた)	51.8	-	74.0	-	48.6	-	50.5	-	33.9	-	24.7	-	42.3	-	48.7	-
教職員が全国障害者スポーツ大会やジャパンパラ大会、種目別全日本選手権などの全国大会の運営に関わっている(いた)	18.1	17.3	20.0	23.2	12.2	25.3	19.3	16.8	18.5	16.5	4.1	6.8	14.1	16.2	14.0	21.0
教職員が障害者スポーツの競技団体の運営に関わっている(いた)	33.5	34.8	48.0	41.1	24.3	37.3	33.2	38.8	24.2	26.2	11.0	13.7	32.2	39.4	29.5	29.0
幼児児童生徒や卒業生がパラリンピック、デフリンピック、種目別世界選手権やアジア大会などの国際大会に出場したことがある	13.5	-	44.0	-	51.4	-	7.8	-	7.3	-	2.7	-	6.7	-	11.4	-
幼児児童生徒や卒業生がスペシャルオリンピックスの国際大会に出場したことがある	5.4	-	4.0	-	0.0	-	6.8	-	0.0	-	1.4	-	8.1	-	4.1	-
あてはまる事例を把握していない	24.3	26.6	2.0	14.3	14.9	18.7	21.1	24.5	31.5	39.8	38.4	41.1	18.1208	23.2	22.3	29.0

注4) 2013 年度調査と質問が異なるため、比較ができない項目もある。

2. 7 運動・スポーツ活動のための施設

運動・スポーツ活動のための施設は、「体育館」(93.5%)が最も多く、次いで「グラウンド」(86.0%)、「プレイルーム(多目的室)」(62.5%)であった(図表 2-43)。「その他」(4.4%)は、柔道場、剣道場、自立活動室・遊戯室などであった。

図表 2-43 学校にある運動・スポーツ活動のための施設(複数回答)

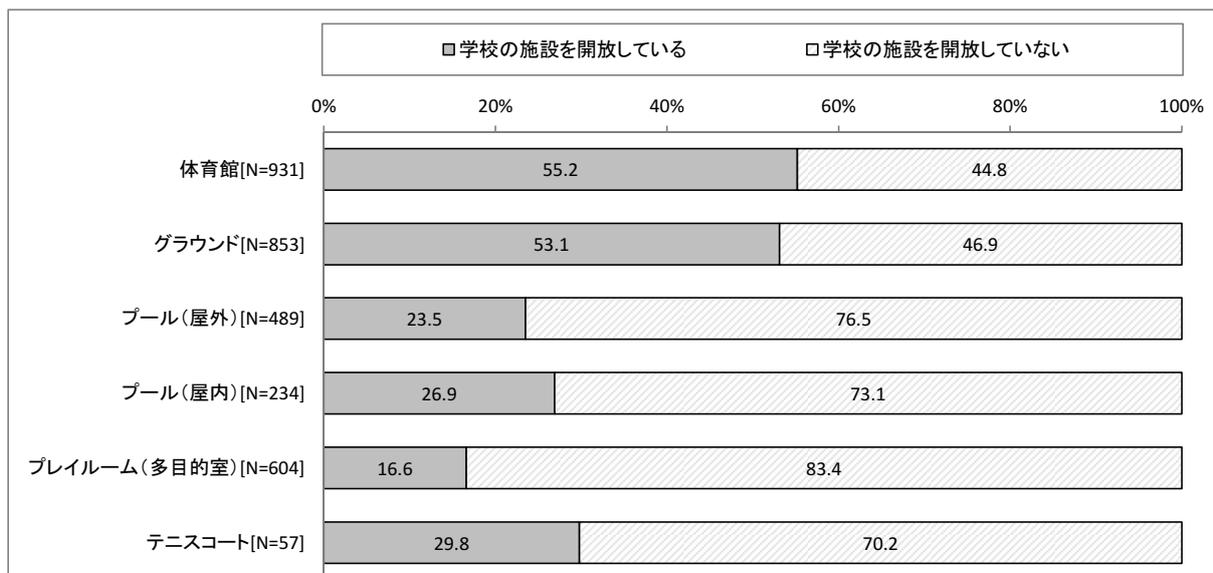


2. 8 学校開放施設で行われている活動

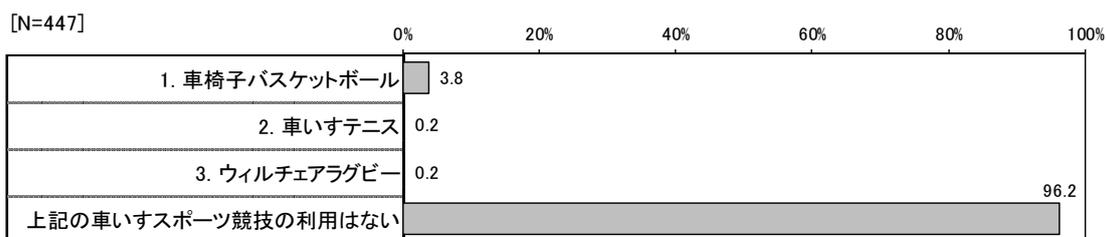
保有している学校体育施設の開放状況をみると、「体育館」が55.2%で最も高く、次いで「グラウンド」(53.1%)、「テニスコート」(29.8%)であった(図表 2-44)。

また、「体育館」を開放した車いすスポーツ競技の利用については、ほぼ全ての学校が「車いすスポーツ競技(車椅子バスケットボール、車いすテニス、ウィルチェアラグビー)の利用はない」と回答した(図表 2-45)。

図表 2-44 学校体育施設の自校の幼児児童生徒以外への開放状況



図表 2-45 体育館を開放して行われている車椅子スポーツ競技(複数回答)



学校開放施設で行われている活動は、「地域の健常者からなるスポーツの同好会やサークルの定期的な活動」が約 5 割、「卒業生を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動」が約 3 割、「卒業生以外の地域の障害者を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動」が約 2 割であった（図表 2-46）。

障害種別に学校開放施設で行われている活動についてみると、「視覚障害(単置)」の「卒業生を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動」が約 6 割と、積極的に行われていることがわかった。また、2013 年度調査と比較すると、「その他複数障害(併置)」を除く全ての障害種で、「その他の定期的な活動」の割合が増加しており、具体的には近隣の中学校・高等学校の部活動、PTA や保護者のスポーツ活動、放課後等デイサービスなどに利用されていた。

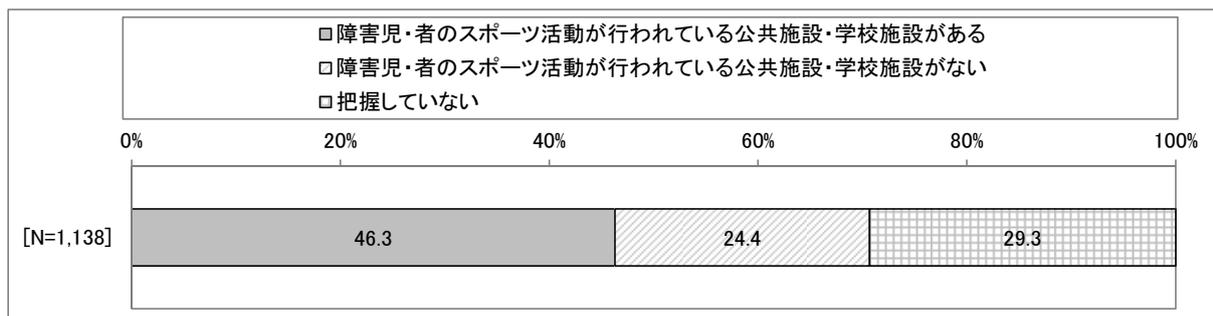
図表 2-46 学校開放施設で行われている活動(障害種別)(複数回答)

	全体		視覚障害(単置)		聴覚障害(単置)		知的障害(単置)		肢体不自由(単置)		病弱(単置)		知的障害(併置・肢体不自由)		その他の複数障害(併置)	
	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年
	N=644	N=528	N=39	N=42	N=48	N=48	N=283	N=264	N=72	N=55	N=21	N=18	N=91	N=61	N=115	N=40
卒業生を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動	31.8	34.7	61.5	57.1	43.8	33.3	31.1	34.1	18.1	27.3	4.8	11.1	35.2	41.0	22.6	27.5
卒業生以外の地域の障害者を中心としたスポーツの同好会やサークルの定期的な活動	22.2	23.1	35.9	23.8	25.0	25.0	21.6	23.9	23.6	29.1	4.8	11.1	18.7	23.0	18.3	12.5
地域の健常者からなるスポーツの同好会やサークルの定期的な活動	51.9	50.9	61.5	64.3	54.2	66.7	53.4	47.7	33.3	40.0	33.3	61.1	48.4	44.3	50.4	60.0
障害者と健常者が共に活動することを目的とした地域スポーツクラブ等の定期的な活動	5.9	5.1	20.5	2.4	6.3	4.2	4.9	5.7	2.8	5.5	4.8	0.0	6.6	9.8	3.5	0.0
その他の定期的な活動	16.8	10.8	10.3	0.0	14.6	6.3	13.8	12.1	23.6	12.7	28.6	11.1	22.0	9.8	13.0	17.5
定期的な活動には開放されていない	18.2	17.2	5.1	9.5	14.6	14.6	15.2	18.6	26.4	21.8	33.3	11.1	19.8	14.8	18.3	20.0

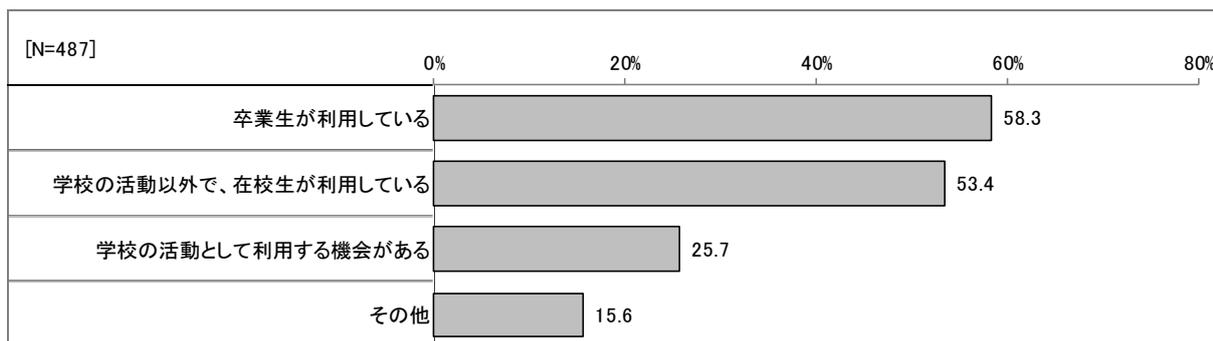
2.9 同じ市区町村内の公共施設・学校施設の利用

同じ市区町村内の障害児・者のスポーツ活動が行われている公共施設・学校施設について、「障害児・者のスポーツ活動が行われている公共施設・学校施設がある」と回答した学校は 46.3%であった(図表 2-47)。「障害児・者のスポーツ活動が行われている公共施設・学校施設がある」と回答した学校の利用実績は、「卒業生が利用している」(58.3%)が最も多く、次いで「学校の活動以外で、在校生が利用している」(53.4%)であった(図表 2-48)。

図表 2-47 障害者スポーツ活動が行われている公共施設・学校施設の有無



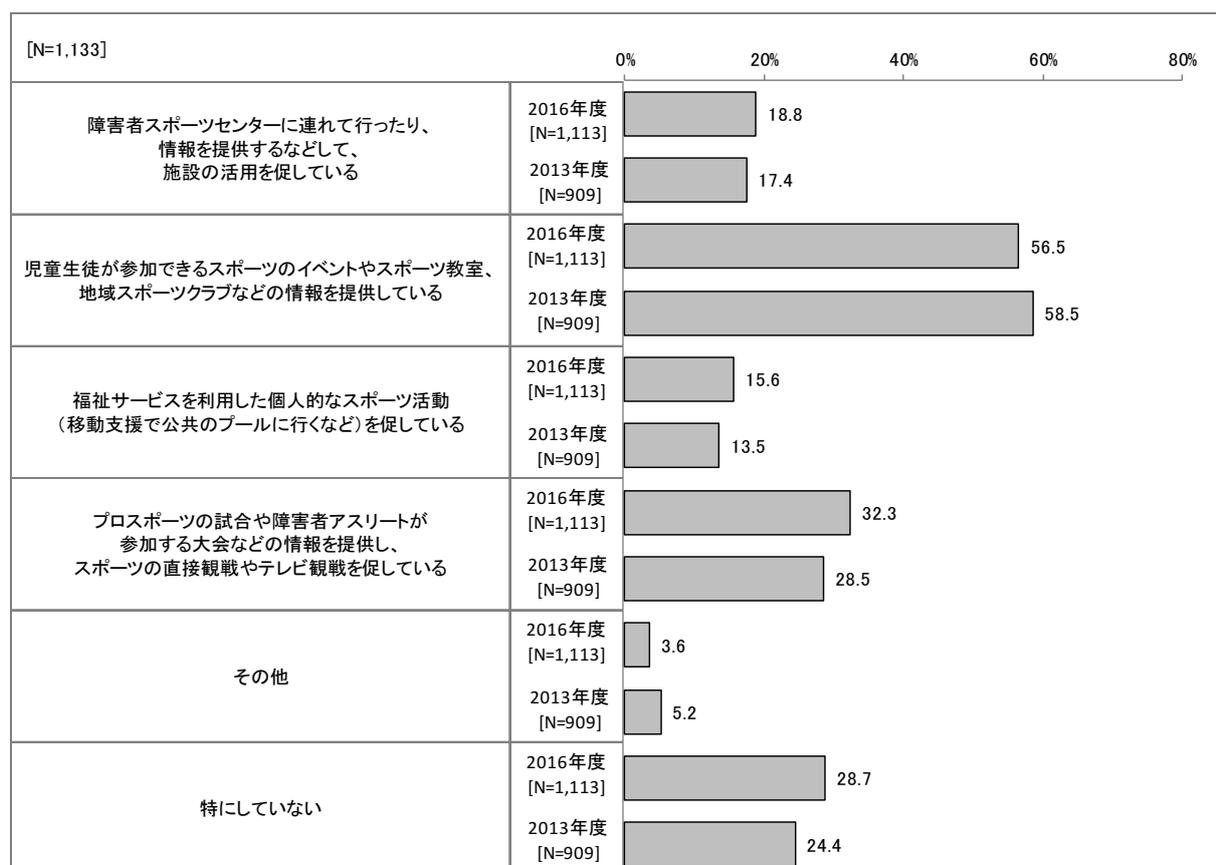
図表 2-48 障害者スポーツ活動が行われている公共施設・学校施設の利用
(複数回答)



2. 10 児童生徒の学外、及び卒業後の自主的なスポーツ活動の充実につながる配慮

児童生徒の学外、及び卒業後の自主的なスポーツ活動の充実につながる配慮についてみると、「児童生徒が参加できるスポーツのイベントやスポーツ教室、地域スポーツクラブなどの情報を提供している」が56.5%で最も多く、次いで「プロスポーツの試合や障害者アスリートが参加する大会などの情報を提供し、スポーツの直接観戦やテレビ観戦を促している」が32.3%であった(図表 2-49)。「その他」(3.6%)は、保護者を交えた障害者スポーツ講習会の開催、卒業生のための情報交換の場の提供などがあげられた。一方で、約3割の学校が「特にしていない」と回答している。

**図表 2-49 児童生徒の学外、及び卒業後の自主的なスポーツ活動の充実につながる配慮
(複数回答)**

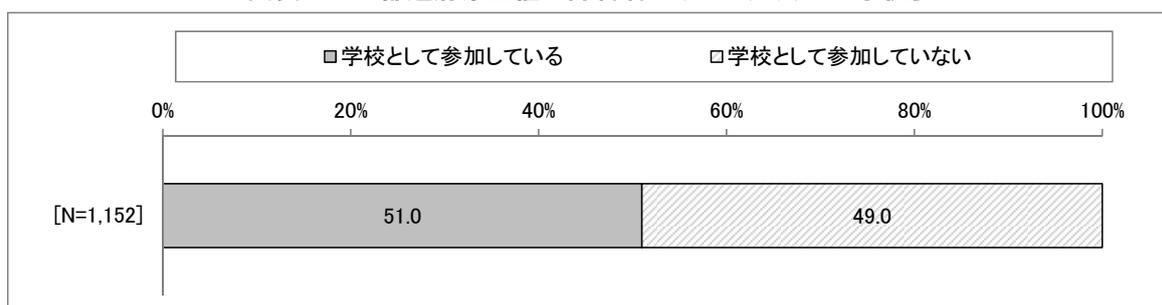


2. 11 都道府県主催の障害者スポーツ大会への参加状況

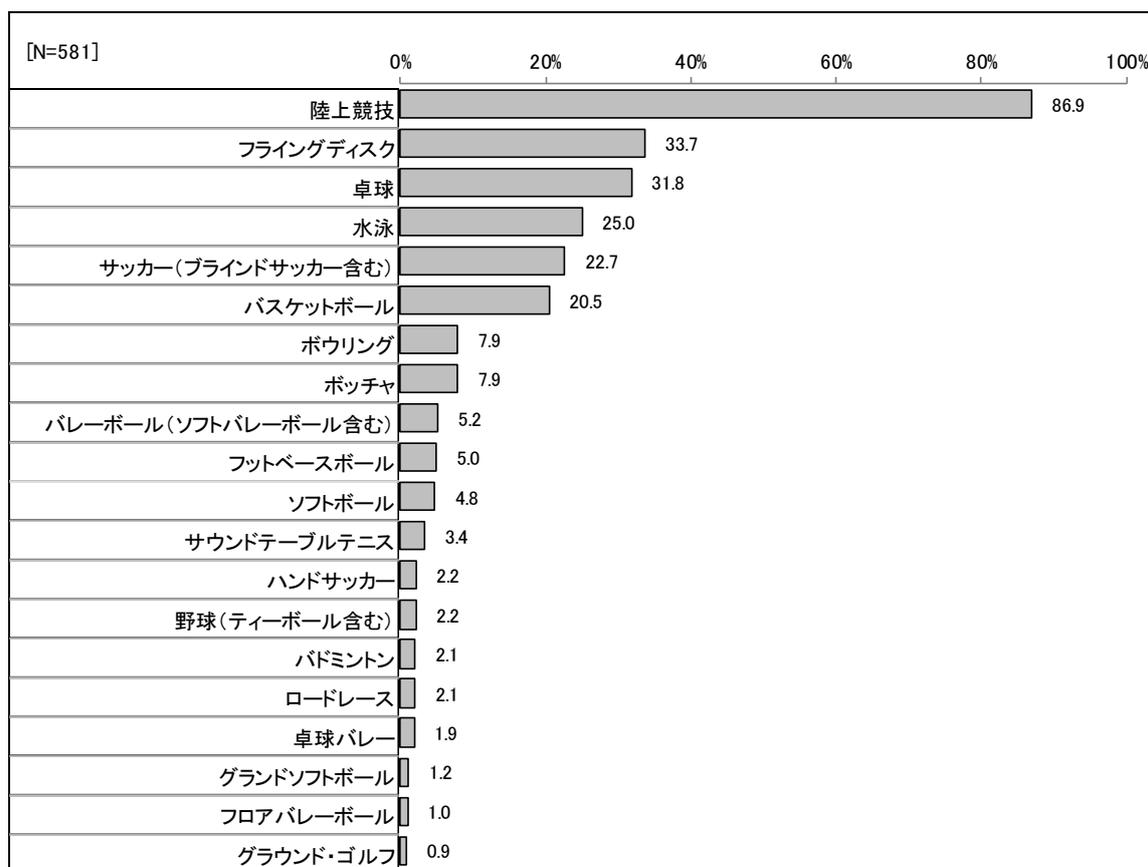
都道府県主催の障害者スポーツ大会への参加については、「学校として参加している」学校が約半分を占めた(図表 2-50)。参加種目については、「陸上競技」(86.9%)が最も多く、次いで「フライングディスク」(33.7%)、「卓球」(31.8%)であった(図表 2-51)。「ボッチャ」(7.9%)を除く上位 11 種目が全国障害者スポーツ大会の実施競技でもあることから、特別支援学校の児童生徒は、全国障害者スポーツ大会への出場を目標に運動・スポーツに取り組んでいることがうかがえる。

なお、「学校として参加していない」と回答した学校の約 5 割が「幼児児童生徒の個人参加がない」と回答している(図表 2-52)。

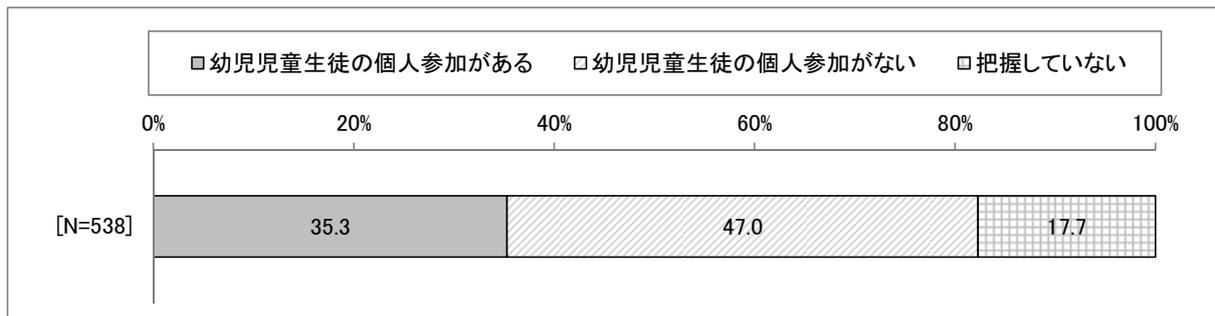
図表 2-50 都道府県主催の障害者スポーツ大会への学校参加



図表 2-51 都道府県主催の障害者スポーツ大会の参加種目(上位 20 種目)(複数回答)



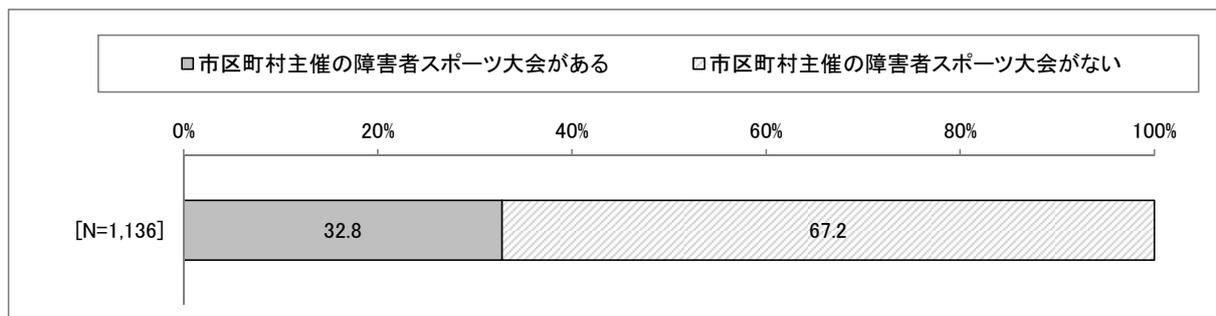
図表 2-52 都道府県主催の障害者スポーツ大会への幼児児童生徒の参加状況



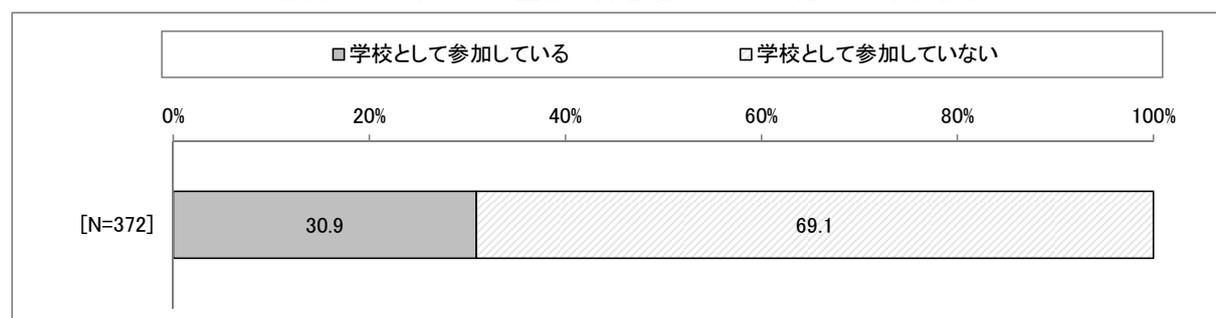
2. 12 市区町村主催の障害者スポーツ大会への参加状況

市区町村主催の障害者スポーツ大会への参加状況は、「市区町村主催の障害者スポーツ大会がある」と回答した学校が約3割おり、そのうち、「学校として参加している」学校は約3割であった(図表 2-53、2-54)。参加種目については、「陸上競技」(70.4%)が最も多く、次いで「卓球」と「フライングディスク」(20.0%)であり、都道府県主催の障害者スポーツ大会参加種目(図表 2-51)と類似していた(図表 2-55)。

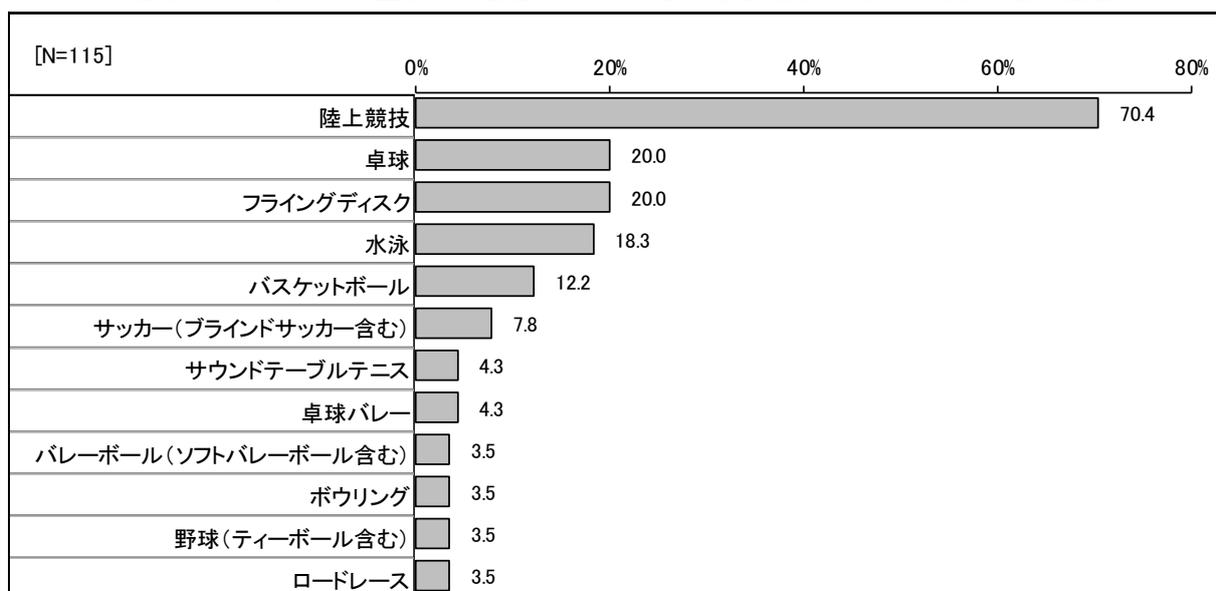
図表 2-53 市区町村主催の障害者スポーツ大会の有無



図表 2-54 市区町村主催の障害者スポーツ大会への学校参加

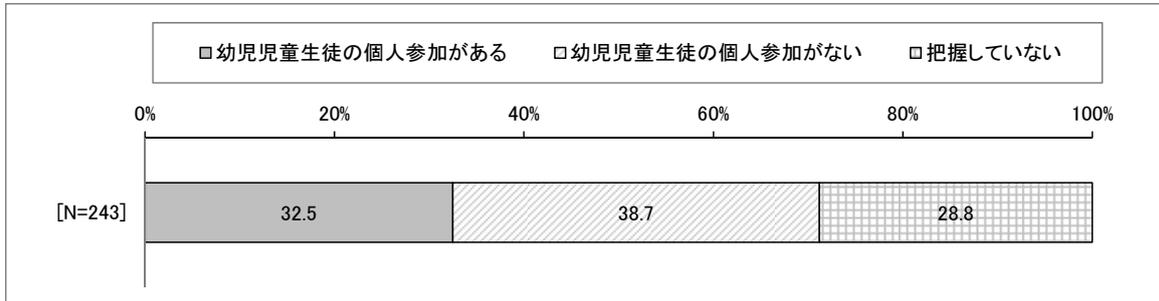


図表 2-55 市区町村主催の障害者スポーツ大会の参加種目(上位 12 種目)(複数回答)



なお、「学校として参加していない」と回答した学校の約 4 割が、「幼児児童生徒の個人参加がない」と回答した(図表 2-56)。

図表 2-56 市区町村主催の障害者スポーツ大会への幼児児童生徒の参加状況



2. 13 スポーツ活動を充実させるための重要な取組

幼児児童生徒のスポーツ活動を充実させるための重要な取組について、「用具や器具の確保・充実」が70.5%と最も多く、次いで「教職員の専門知識・ノウハウの習得」(61.8%)、「校内の施設やスペースの確保・拡充」(61.1%)、「教職員がスポーツを指導できる時間の確保」(59.7%)であった(図表2-57)。

障害種別にみると、ほぼ全ての障害種で、「用具や器具の確保・充実」の割合が全体的に高かった。「視覚障害(単置)」では、「教職員の専門知識・ノウハウの習得」が7割を超えている。また、「肢体不自由(単置)」では、「幼児児童生徒の体調管理のための医療スタッフ(看護師など)の確保」が4割を超えており、他の障害種と比べて高かった。

図表 2-57 スポーツ活動を充実させるために重要な取組(障害種別)(複数回答)

	全体		視覚障害 (単置)		聴覚障害 (単置)		知的障害 (単置)		肢体不自由 (単置)		病弱 (単置)		知的障害 (併置) 肢体不自由		その他の複数障害 (併置)	
	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年	2016年	2013年
	N=1,135	N=909	N=50	N=56	N=74	N=75	N=503	N=441	N=124	N=103	N=73	N=73	N=149	N=99	N=193	N=62
教職員がスポーツを指導できる時間の確保	59.7	53.0	68.0	64.3	63.5	70.7	60.8	54.4	41.9	36.9	28.8	28.8	63.8	63.6	63.7	50.0
教職員の専門知識・ノウハウの習得	61.8	57.5	76.0	75.0	58.1	73.3	57.9	54.2	61.3	58.3	49.3	52.1	63.1	54.5	63.7	56.5
外部人材(ボランティアスタッフを含む。 選択肢4を除く)の確保・充実	46.3	38.1	42.0	32.1	45.9	42.7	47.5	41.0	44.4	34.0	28.8	20.5	55.0	43.4	38.3	35.5
幼児児童生徒の体調管理のための医療スタッフ (看護師など)の確保	18.4	13.8	8.0	5.4	6.8	5.3	12.5	9.8	43.5	32.0	20.5	21.9	18.8	15.2	20.7	17.7
校内の施設やスペースの確保・拡充	61.1	62.5	50.0	48.2	54.1	53.3	65.8	68.9	46.8	54.4	46.6	56.2	61.1	63.6	59.6	59.7
用具や器具の確保・充実	70.5	69.2	66.0	71.4	67.6	76.0	70.4	71.2	59.7	66.0	50.7	53.4	75.2	68.7	72.5	69.4
幼児児童生徒がスポーツに取り組む時間を 確保するための移動手段の充実	38.1	29.7	38.0	25.0	24.3	28.0	36.4	27.0	45.2	39.8	9.6	19.2	45.6	35.4	42.0	41.9
その他	4.3	3.7	6.0	5.4	2.7	4.0	3.4	2.7	7.3	5.8	6.8	4.1	3.4	6.1	4.1	1.6

2. 14 学校が保有・整備しているスポーツ用具

保有・整備しているスポーツ用具について、全体では「器械運動用具(跳び箱、マット、鉄棒など)」(84.9%)が最も割合が高く、次いで「陸上運動用具(バトン、ハードル、ライン引きなど)」(83.5%)、「バスケットボール用具」(80.0%)があげられた(図表 2-58～図表 2-60)。

図表 2-58 学校が保有・整備しているスポーツ用具(全体・視覚障害・聴覚障害)(複数回答)

(%)

順位	全体[N=1,120]		視覚障害(単置)[N=49]		聴覚障害(単置)[N=72]	
1位	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	84.9	サウンドテーブルテニス用具	98.0	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	97.2
2位	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	83.5	フロアバレーボール用具		陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	
3位	バスケットボール用具	80.0	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	95.9	バスケットボール用具	90.3
4位	バドミントン用具	77.2	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	91.8	卓球用具	88.9
5位	卓球用具	76.3	グランドソフトボール用具		体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	
6位	サッカー用具	72.9	プール用水泳用具	87.8	バレーボール用具	87.5
7位	プール用水泳用具	70.2	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	83.7	バドミントン用具	
8位	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	70.1	バスケットボール用具	67.3	サッカー用具	79.2
9位	バレーボール用具	68.5	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)	61.2	ソフトバレーボール用具	
10位	ソフトバレーボール用具	62.8	ソフトボール用具	59.2	ソフトボール用具	75.0
11位	ソフトボール用具	52.8	サッカー用具	57.1	プール用水泳用具	70.8
12位	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)	45.4	卓球用具		武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)	54.2
13位	ティーボール用具	43.2	バレーボール用具	55.1	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)	52.8
14位	テニス用具	20.6	バドミントン用具	49.0	ティーボール用具	43.1
15位	ハンドボール用具	17.3	ゴールボール用具	46.9	テニス用具	40.3
16位	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)	17.0	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)		ハンドボール用具	29.2
17位	タグラグビー用具	11.5	ソフトバレーボール用具	36.7	タグラグビー用具	16.7
18位	グランドソフトボール用具	9.0	テニス用具	26.5	グランドソフトボール用具	5.6
19位	フロアバレーボール用具	7.9	ハンドボール用具	18.4	フライングディスク用具	4.2
20位	サウンドテーブルテニス用具	7.7	ティーボール用具	14.3	サウンドテーブルテニス用具	
21位	ゴールボール用具	5.0	フライングディスク用具	4.1	ゴールボール用具	1.4
22位	ポッチャ用具	4.5	フライングディスク用具	2.0	ポッチャ用具	
23位	フライングディスク用具	2.8				

図表 2-59 学校が保有・整備しているスポーツ用具
(知的障害・肢体不自由・病弱)(複数回答)

(%)

順位	知的障害(単置)[N=490]		肢体不自由(単置)[N=119]		病弱(単置)[N=66]	
1位	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	86.7	プールの水泳用具	76.5	卓球用具	89.4
2位	バスケットボール用具	82.2	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	72.3	バドミントン用具	84.8
3位	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	81.4	卓球用具	68.1	バスケットボール用具	68.2
4位	バドミントン用具	78.6	バドミントン用具	63.9	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	63.6
5位	サッカー用具	78.4	バスケットボール用具	63.0	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	62.1
6位	卓球用具	73.3	バレーボール用具	59.7		
7位	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	72.7	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	52.9	バレーボール用具	56.1
8位	プールの水泳用具	70.2	ソフトバレーボール用具	49.6	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	51.5
9位	バレーボール用具	65.7	サッカー用具	47.1	サッカー用具	50.0
10位	ソフトバレーボール用具	61.0	テニス用具	42.9	ソフトボール用具	45.5
11位	ソフトボール用具	50.6	ソフトボール用具	38.7	テニス用具	31.8
12位	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)	45.9	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)	34.5	テニス用具	30.3
13位	テニス用具	41.4	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	29.4	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)	25.8
14位	ハンドボール用具	18.8	テニス用具	17.6	プールの水泳用具	24.2
15位	テニス用具	17.6	ポッチャ用具	13.4	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)	
16位	タグラグビー用具	10.8	ハンドボール用具	8.4	ハンドボール用具	18.2
17位	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)	8.6	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)		ポッチャ用具	9.1
18位	フライングディスク用具	3.1	フロアバレーボール用具	6.7	フラッグフットボール用具	4.5
19位	フラッグフットボール用具	2.9	タグラグビー用具	4.2	ゴールボール用具	
20位	グランドソフトボール用具		サウンドテーブルテニス用具		グランドソフトボール用具	3.0
21位	ポッチャ用具	2.4	フライングディスク用具	3.4	サウンドテーブルテニス用具	
22位	フロアバレーボール用具	2.2	グランドソフトボール用具	2.5	フロアバレーボール用具	1.5
23位	ゴールボール用具	1.8	ゴールボール用具	1.7		

図表 2-60 学校が保有・整備しているスポーツ用具
(知的障害と肢体不自由の併置校・その他の複数障害の併置校) (複数回答)

(%)

順位	知的障害+肢体不自由(併置)[N=141]		その他の複数障害(併置)[N=183]	
1位	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	96.5	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	94.0
2位	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	95.0	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	89.6
3位	バスケットボール用具	87.2	バスケットボール用具	83.1
4位	サッカー用具	85.8	卓球用具	82.0
5位	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	81.6	バドミントン用具	80.9
6位	卓球用具	80.9	サッカー用具	75.4
7位	バドミントン用具	80.1	バレーボール用具	74.9
8位	バレーボール用具	78.0	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	72.7
9位	プール用水泳用具	76.6		
10位	ソフトバレーボール用具	72.3	ソフトバレーボール用具	69.4
11位	ソフトボール用具	57.4	ソフトボール用具	56.3
12位	ティーボール用具	55.3	ティーボール用具	50.8
13位	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)	50.4		
14位	ラグビー用具	20.6	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)	20.2
15位	テニス用具	18.4	テニス用具	19.7
16位	ハンドボール用具	17.0	ハンドボール用具	14.2
17位	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)	11.3	グランドソフトボール用具	13.7
18位	グランドソフトボール用具	5.7	ラグビー用具	11.5
19位	フライングディスク用具		サウンドテーブルテニス用具	10.4
20位	ボッチャ用具	5.0	フロアバレーボール用具	9.8
21位	サウンドテーブルテニス用具	3.5	ゴールボール用具	8.7
22位			ボッチャ用具	4.4
23位				

2. 15 今後必要としているスポーツ用具

今後具体的に必要としているスポーツ用具をみると、全体では「体づくり運動用具(縄跳び、一輪車など)」(21.2%)が最も多く、次いで「サッカー用具」(20.2%)、「陸上運動用具(バトン、ハードル、ライン引きなど)」(19.5%)が多かった(図表 2-61～図表 2-63)。

図表 2-61 今後必要とするスポーツ用具(全体・視覚障害・聴覚障害)(複数回答)

(%)							
順位	全体[N=718]		視覚障害(単置)[N=30]		聴覚障害(単置)[N=35]		
1位	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	21.2	ゴールボール用具	46.7	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	28.6	
2位	サッカー用具	20.2	フロアバレーボール用具	30.0	タグラグビー用具	22.9	
3位	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	19.5	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)		武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)		
4位	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	19.1	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	23.3	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	20.0	
5位	テーブル用具	17.7	サウンドテーブルテニス用具		表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)		
6位	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)		体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	20.0	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	17.1	
7位	プール用水泳用具	17.4	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)	16.7	サッカー用具	14.3	
8位	タグラグビー用具	17.3	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)		ソフトボール用具		
9位	バスケットボール用具	14.9	プール用水泳用具	13.3	ハンドボール用具	11.4	
10位	卓球用具	14.2	グランドソフトボール用具		バスケットボール用具		
11位	バドミントン用具	13.9	サッカー用具	10.0	テニス用具	8.6	
12位	ソフトバレーボール用具	13.5	タグラグビー用具		グランドソフトボール用具		
13位	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)	12.8	フラッグフットボール用具	6.7	プール用水泳用具	5.7	
14位	フロアバレーボール用具	11.8	テーブル用具		フラッグフットボール用具		
15位	ゴールボール用具	11.4	ソフトバレーボール用具	3.3	テーブル用具	2.9	
16位	ソフトボール用具	10.0	ハンドボール用具		卓球用具		
17位	テニス用具	8.2	卓球用具	3.3	サウンドテーブルテニス用具		
18位	サウンドテーブルテニス用具		テニス用具		ソフトバレーボール用具		
19位	グランドソフトボール用具	7.8	/	3.3	バレーボール用具		
20位	バレーボール用具	7.2			バドミントン用具		
21位	フラッグフットボール用具	6.0			ゴールボール用具		
22位	ハンドボール用具	5.6			フライングディスク用具		
23位	ポッチャ用具	5.2			/	3.3	フロアバレーボール用具
							2.9

図表 2-62 今後必要とするスポーツ用具
(知的障害・肢体不自由・病弱)(複数回答)

(%)

順位	知的障害(単置)[N=329]		肢体不自由(単置)[N=70]		病弱(単置)[N=36]	
1位	サッカー用具	23.7	プール用水泳用具	18.6	武道用具 (柔道着、柔道壺、剣道防具、竹刀など)	25.0
2位	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	23.4	フロアバレーボール用具		ソフトバレーボール用具	22.2
3位	ティーボール用具	22.2	ゴールボール用具	15.7	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)	
4位	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	21.0	武道用具 (柔道着、柔道壺、剣道防具、竹刀など)	12.9	サッカー用具	
5位	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	20.7	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	11.4	テニス用具	16.7
6位	バスケットボール用具	18.8	タグラグビー用具		フロアバレーボール用具	
7位	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)		ティーボール用具		器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	13.9
8位	バドミントン用具		17.3		サウンドテーブルテニス用具	
9位	プール用水泳用具	17.0	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)		体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	11.1
10位	卓球用具	16.1	ポッチャ用具		卓球用具	
11位	タグラグビー用具	15.5	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	10.0	バドミントン用具	
12位	ソフトバレーボール用具	13.7	卓球用具	8.6	バスケットボール用具	
13位	ソフトボール用具	11.2	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	7.1	タグラグビー用具	8.3
14位	武道用具 (柔道着、柔道壺、剣道防具、竹刀など)	9.4	ソフトバレーボール用具		ティーボール用具	
15位	バレーボール用具	8.2	テニス用具	5.7	ハンドボール用具	
16位	ゴールボール用具	7.3	サッカー用具	4.3	バレーボール用具	
17位	フロアバレーボール用具	7.0	フラッグフットボール用具		グランドソフトボール用具	
18位	テニス用具	6.7	バドミントン用具		サウンドテーブルテニス用具	5.6
19位	グランドソフトボール用具	5.8	グランドソフトボール用具		ゴールボール用具	
20位	サウンドテーブルテニス用具		2.9	バスケットボール用具	ポッチャ用具	
21位	フラッグフットボール用具	4.3	バレーボール用具	1.4	ソフトボール用具	
22位	ハンドボール用具	4.0	フライングディスク用具		フラッグフットボール用具	2.8
23位	ポッチャ用具					

図表 2-63 今後必要とするスポーツ用具
(知的障害と肢体不自由の併置校・その他の複数障害の併置校) (複数回答)

		(%)	
順位	知的障害+肢体不自由(併置)[N=93]	その他の複数障害(併置)[N=125]	
1位	体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)	26.9	サッカー用具
2位	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)	25.8	タグラグビー用具
3位	プール用水泳用具		体づくり運動用具 (縄跳び、一輪車など)
4位	タグラグビー用具	22.6	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)
5位	テーブル用具	21.5	プール用水泳用具
6位	サッカー用具	19.4	ソフトバレーボール用具
7位	バスケットボール用具	18.3	フロアバレーボール用具
8位	器械運動用具 (跳び箱、マット、鉄棒など)	17.2	陸上運動用具 (バトン、ハードル、ライン引きなど)
9位	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)	16.1	卓球用具
10位	卓球用具	15.1	表現運動・ダンス用具 (太鼓、棒、輪など)
11位	バドミントン用具		バドミントン用具
12位	ソフトボール用具	12.9	バスケットボール用具
13位	ゴールボール用具		テーブル用具
14位	ソフトバレーボール用具	11.8	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)
15位	ポッチャ用具	10.8	ソフトボール用具
16位	グラウンドソフトボール用具	9.7	ゴールボール用具
17位	フロアバレーボール用具		グラウンドソフトボール用具
18位	バレーボール用具	8.6	サウンドテーブルテニス用具
19位	テニス用具		テニス用具
20位	武道用具 (柔道着、柔道畳、剣道防具、竹刀など)		フラッグフットボール用具
21位	フラッグフットボール用具	7.5	バレーボール用具
22位	ハンドボール用具		ハンドボール用具
23位			ポッチャ用具

3. 調査結果(事例調査)

全国の特別支援学校における部活動・クラブ活動や外部指導者の導入状況、卒業後の運動・スポーツ活動状況などを明らかにするために、特徴的な学校に事例ヒアリング調査を行った(図表 2-64)。

図表 2-64 事例調査で対象とした特別支援学校

学校名	属性			特徴
	障害種区分	学校種区分	学部形態	
大阪府立 大阪北視覚支援学校	視覚障害	単置	幼稚部 小学部 中学部 高等部本科普通科 高等部理療系学科	<ul style="list-style-type: none"> ・中学部・高等部本科普通科・高等部理療系学科が合同で運動部活動を実施 ・プレイルームと柔道場を活用して重度・重複障害者の体育と部活動を実施 ・教員、卒業生、在校生徒で社会人チームを結成し、卒業後のスポーツ環境を整備
山口県立 防府総合支援学校	視覚障害 聴覚障害 知的障害 肢体不自由 病弱	併置	小学部 中学部 高等部普通科	<ul style="list-style-type: none"> ・知的障害、肢体不自由、病弱の生徒が合同で体育と運動部活動を実施 ・7種目の運動部を通じて多様な運動・スポーツに触れる機会を提供 ・生徒と教員で編成される車椅子バスケットボールチームは県内唯一
鹿児島県立 鹿児島養護学校	知的障害 肢体不自由	併置	小学部 中学部 高等部普通科	<ul style="list-style-type: none"> ・「スポーツ同好会」で教員の専門性や生徒の障害特性に応じて様々な種目を実施 ・外部指導者を活用し、専門家による指導で生徒は多様なニュースポーツを体験 ・体育館を鹿児島県総合体育センター主催の知的障害者のサッカーイベントに開放
広島県立 尾道特別支援学校	聴覚障害 知的障害	併置	(聴覚障害部門) 幼稚部 小学部 中学部 (知的障害部門) 小学部 中学部 高等部	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害と知的障害の生徒が合同で運動部活動を実施 ・卓球部・陸上競技部・ヒップホップステップ部で専門的指導を行える外部指導員を活用 ・積極的に地域のイベントに出演し、学校の知名度向上と生徒の社会参加を支援
鳥取県立 琴の浦高等特別支援学校	知的障害	単置	高等部職業学科	<ul style="list-style-type: none"> ・14人の教員が障がい者スポーツ指導員資格を保有し、全員が部活動を指導 ・知的障害の高等部を設置する特別支援学校5校で年に2回交流会を開催 ・4つの運動部で外部指導者を活用し、教員の負担を軽減

大阪府立大阪北視覚支援学校

【特徴】

中学部・高等部普通科・高等部理療系学科が合同で運動部活動を実施
プレイルームと柔道場を活用して重度・重複障害者の体育と部活動を実施
教員、卒業生、在校生徒で社会人チームを結成し、卒業後のスポーツ環境を整備

1. プロフィール

(1) 設立経緯

1900年、盲人実業家・五代五右衛門氏が「私立大阪盲啞院」として授業を開始したのが始まりである。その後、大阪市への譲渡や学校名の改称などを経て、2016年4月に大阪府へ移管され、「大阪府立大阪北視覚支援学校」となった。大阪北部を校区とする視覚障害児・者を対象としており、幼稚部・小学部・中学部・高等部本科普通科・高等部理療系学科を設置している。

(2) 児童生徒数

2016年8月現在、児童生徒総数は94人である(図表2-65)。小学部、中学部、高等部本科普通科には、肢体不自由、知的障害、発達障害などを併せ持つ重度・重複障害の児童生徒が在籍している。

図表 2-65 大阪北視覚支援学校の児童生徒数内訳

(人)

	幼稚部	小学部	中学部	高等部本科普通科	高等部理療系学科	合計
児童生徒数 (重度・重複障害児童生徒数)	10	23(8)	12(6)	19(4)	30	94

(3) 重複委員会の設置

小学部・中学部・高等部本科普通科に在籍する重度・重複障害の児童生徒に、障害特性に応じたきめ細やかな教育的支援を提供するため、「重複委員会」を設置している。18人の児童・生徒を対象に、14人の教員が関わり、プールの授業やクリスマス会などのイベントを企画している。

2. 運動部活動の現状

(1) 背景

2006年、普通校での指導経験のある保健体育科の教員が中心となって、部活動システムの整備が進められた。それまで特定の教員に運営と指導の負担がかかり、在学中から卒業後を見据えた活動を充分に行えていなかったが、視覚障害者が特に参加に障壁を感じる団体競技(野球〈グランドソフトボール〉とフロアバレーボール)の部活動化を推し進め、その後、水泳部、卓球部、サウンドテーブルテニス部、ダンス部の活性化にも繋がった。

(2) 実施種目・部員数

運動系では、視覚障害者独自の競技から一般の競技まで幅広く行っており、大会参加を目指すクラブ(野球〈グラウンドソフトボール〉、フロアバレーボール、水泳、卓球)から運動不足解消を目標にするクラブ(ダンス部等)まで活動は多岐にわたる(図表 2-66)。中学部・高等部本科普通科・高等部理療系学科の三学部が合同で実施しており、高等部理療系学科の生徒を対象にあん摩マッサージ、鍼、灸の知識・技能の向上を目的とした理療系の部活動(モビリティセッション部・手技療法研究会)も設置している。



約 30 人の生徒が運動部活動に参加している。グラウンドソフトボール部の部員 10 人のうち、7 人がフロアバレーボールと兼部するなど、多くの生徒が 2 つ以上の部活動を兼部している。

図表 2-66 大阪北視覚支援学校の部活動の詳細

部名		野球 (グラウンドソフトボール)	フロアバレーボール	水泳	卓球	サウンドテーブル テニス	ダンス
部員	部員総数	10人	12人	10人	3人	7人	6人
	兼部有無	有り (フロアバレーボール)	有り (野球)	有り (フロアバレーボール、 野球、卓球)	有り (フロアバレーボール)	有り (フロアバレーボール、 水泳、野球)	無し
指導員数		6人	7人	7人	1人	5人	5人
活動状況	曜日	週4回	週4回	夏は毎日	週3回	週3回	週2回
	時期	2~6月 8月全国大会	4~10月	夏季	大会前	通年	通年
	場所	グラウンド	体育館	屋外プール	体育館	体育館	プレハブ大教室
主な 出場大会		近畿盲学校野球大会	近畿盲学校 フロアバレーボール大会	近畿盲学校水泳大会	近畿盲学校卓球大会	近畿盲学校卓球大会	校内発表会

注 1) グラウンドソフトボール:ボールの転がる音を頼りに、視覚障害のある選手が 1 チーム 10 人で行う野球競技。

(3) 運営体制

人事異動による部活動への影響を最小限に抑えるため、各部に顧問 1 人を配置し、若手教員・講師は副顧問として複数の部活動を兼務している。87 人の教員のなかで、保健体育免許保有者は教頭を含め 11 人である。重複障害者が多く在籍するため、各部員が必要とする支援を的確に提供するため、各部には顧問・副顧問を含め、保健体育科の教員を多く配置している。

(4) 近畿大会への参加

1) 近畿盲学校体育連盟主催大会

近畿盲学校体育連盟は、野球、フロアバレーボール、卓球、水泳の 4 種目の近畿地区大会を主催している。2016 年度は、野球 12 人、フロアバレーボール 12 人、卓球 10 人、水泳 10 人が出場した。近畿地区には、視覚障害の特別支援学校が 9 校あり、近年、野球への参加は 5 校程度に留まっているが、フロアバレーボール、卓球、水泳へは、9 校すべてが参加している。

2) 近畿盲学校野球大会（グランドソフトボール）

2016 年度近畿盲学校野球大会は、大阪北視覚支援学校を会場に、63 回目を迎えた。大阪府からは 2 チーム（大阪北視覚支援学校と大阪南視覚支援学校）、奈良県 1 チーム、福井県 1 チーム、兵庫県・滋賀県・和歌山県の合同チーム（合計 5 チーム）が出場した。

なお、全国盲学校野球大会（1 チーム 10 人）は、参加選手数・参加校の減少に伴い、2016 年度大会



を最後に終了した。2017 年度からは、全国盲学校野球大会に代わって、参加人数が少なくても団体競技として参加ができる全国盲学校フロアバレーボール大会（1 チーム 6 人）の開催が予定されている。

3. 卒業後のスポーツ活動の充実に向けて

(1) 地域におけるスポーツ機会の提供

教員の異動や生徒数の減少による運動・スポーツ機会の減少を避けるため、生徒に対して、部活動・クラブ活動への参加に加えて、地域の社会人チームへの参加を促している。したがって、在学中から地域の社会人チームに所属することで、卒業後の運動・スポーツ機会の確保に繋げている。

□ 大阪セイガンズ（グランドソフトボール）

2008 年、大阪北視覚支援学校の教員、卒業生、在校生徒で「大阪セイガンズ」を結成し、大阪府・兵庫県・高知県・三重県を拠点としたグランドソフトボールチームが出場する社会人リーグ「ふれ愛グラソフ・ジャパンリーグ（NPO 法人ふれ愛びっく大阪クラブ主催）」に出場している（図表 2-67）。6 チームによる 2016 年度のリーグは、3 月から 11 月の間に 5 試合行われ、全勝した大阪セイガンズが優勝している。大阪北視覚支援学校のグラウンドも会場として利用された。

□ 大阪ラビッツ（フロアバレーボール）

「大阪セイガンズ」同様、フロアバレーボールの「大阪ラビッツ」は、大阪北視覚支援学校の教員、卒業生、在校生徒で構成され、2009 年より日本フロアバレーボール連盟に加盟している。連盟加盟の 46 チームの日本一を決定する「日本一クラブ決定戦」が毎年 6 月に神奈川ライトセンターで開催されており、2014 年度大会では大阪ラビッツが 3 位に入賞した。

(2) 県内外での練習・遠征

野球部、フロアバレーボール部、卓球部の部員は、大阪南視覚支援学校、全国障害者スポーツ大会出場チーム、社会人リーグチームとの対外試合や、大阪北視覚支援学校を会場とした合宿なども行っている。部活動としての活動以外に、在学生徒も学校へ届出を提出することで、社会人チームメンバーとして全国障害者スポーツ大会や、名古屋や横浜などへの社会人大会の遠征にも同行し、社会性を身につけることができている。

図表 2-67 生徒が参加する社会人チーム

チーム名		大阪セイガンズ		チーム名		大阪ラビッツ		
種目		グラウンドソフトボール		種目		フロアバレーボール		
メンバー	総数	約25人		メンバー	総数	約27人		
	内訳	大阪北視覚支援学校教員 (その他教員、OBも含む)	約14人		内訳	大阪北視覚支援学校教員 (その他教員、OBも含む)	約15人	
		大阪北視覚支援学校の在校生	1人			大阪北視覚支援学校の在校生	4人	
		大阪北視覚支援学校の卒業生	約10人			大阪北視覚支援学校の卒業生	約8人	
活動	曜日	大会参加のみ		活動	曜日	日曜日(不定期)		
	場所				場所	大阪北視覚支援学校体育館		
	実績	2016ふれ愛グラソフ・ジャパンリーグ優勝			実績	2014年度第4回JFVAクラブ日本一決定戦3位		

4. 学校の運動施設

(1) 運動施設

体育館、グラウンド、屋外プール(25m×6 レーン、幼稚園児用プール)、プレイルーム(剣道場)、柔道場がある。プレイルームに併設されている柔道場は、幼稚部の児童に利用され、運動の楽しさや感覚を養うことを目的に畳を素足で走り回れる環境を整備している。上層階の体育館への移動が難しい重度・重複障害の児童生徒のために、教室と同じ1階にあるプレイルームにトランポリンやマットなどの運動用具を設備し、体育やダンス部の活動を行っている。

(2) 学校開放事業

グラウンドは、大阪市から大阪府へ移管された2016年4月以降、大阪府の所管事業である大阪府立高等学校等体育施設開放事業の対象校の一つとして、地域の障害者施設の運動会、視覚障害者スポーツ団体、地域の自治会、スポーツ少年団等に開放し、利用されている。

大阪府立大阪北視覚支援学校

○所在地：大阪府大阪市東淀川区豊里7丁目5-26

○開校年：1900年

○学校種区分：視覚障害

○学級実態：幼稚部、小学部、中学部、高等部本科普通科・高等部理療系学科

山口県立防府総合支援学校

【特徴】

知的障害、肢体不自由、病弱の生徒が合同で体育と運動部活動を実施
7 種目の運動部を通じて多様な運動・スポーツに触れる機会を提供
生徒と教員で編成される車椅子バスケットボールチームは県内唯一

1. プロフィール

(1) 設立経緯

1968 年、肢体不自由の養護学校(山口県立防府養護学校)として開校した。学校教育法の改正に伴い、2008 年以降、山口県内の全ての養護学校、聾学校、盲学校は原則 5 障害(視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱)に対応する「総合支援学校」へ移行している。

(2) 児童生徒数

2016 年 8 月現在、149 人の児童生徒が在籍している(図表 2-68)。肢体不自由の養護学校として設立したが、「総合支援学校」へ移行したことに伴い、児童生徒の障害種の割合が変化し、現在は知的障害が全体の 6 割を占め、肢体不自由は全体の 3 割未満となっている。2017 年 1 月現在、視覚障害(単一)と聴覚障害(単一)の児童生徒は在籍していない。

図表 2-68 防府総合支援学校の児童生徒数内訳

		小学部	中学部	高等部普通科	合計
在籍児童生徒数(人)		44	51	54	149
学級数	単一障害	7	9	10	26
	重複障害	5	6	8	19
	訪問学級	1			1

2. 運動部活動の現状

(1) 背景・目的

開校当初、生徒から体育館で運動したいと要望があったことを受け、保健体育の教員が中心となって、学校での児童生徒のスポーツ環境の基盤を整備していった。課外活動として、顧問教員等の指導の下、生徒の能力・適性、興味・関心等に応じて、生徒自らが課題を見つけ主体的に判断し、解決していく自己指導能力の育成を図ることを目的に活動している。



(2) 実施種目・部員数

車椅子バスケットボール、ソフトボール、卓球、テニス、バスケットボール、陸上競技、カヌー・登山の 7 つの運動部と、手遊び歌、風船バレー、ダンスなどを行うレクリエーション部がある(図表 2-69)。中学部と高等部の知的障害、肢体不自由、病弱の三障害の生徒が合同で実施している。日常の学習において異なる学級に在籍する生徒と一緒に部活動に参加することにより、自分と異なる障害をもつチームメンバーに対する配慮や気遣いを身につけることができ、部活動を通じた相互理解の促進にも繋がっている。

1) 車椅子バスケットボール部／バスケットボール部

部員 5 人で毎週木曜日に活動している。特別支援学校の部活動チームとしては県内唯一であるが、生徒だけではチームが編成できず、教員との混合チームで練習及び大会に参加している。健常者も参加が可能な山口県車椅子バスケットボール選手権大会(2016 年 6 月)へ、毎年重度・重複障害の生徒も出場している。生徒により多くのプレーの機会を提供できるようにと、大会実行委員会や対戦相手に特別ルールとしてネットにボールが触れた時点で得点、他チームの選手が助っ人で参加、試合中のアドバンスなどの配慮をしてもらうことで、生徒の参加が実現している。

2016 年 11 月、防府ライオンズクラブ杯車椅子・FID バスケットボール大会がソルトアリーナ防府で開催された。車椅子の部へは肢体不自由の生徒と教員が合同チームで出場し、FID の部へは、バスケットボール部で活動する知的障害の生徒が出場した。

元保健体育の教員や卒業生が山口県障害者スポーツ協会の会長、山口県車いすバスケットボール連盟の副会長を務めるなど、地域のスポーツ環境の整備に尽力している。



2) 陸上部

部員 14 人が、各自の体力にあわせて、ウォーキングから短距離、中・長距離等の練習に取組み、山口県障がい者陸上競技記録会やキラリンピック兼全国障害者スポーツ大会選手選考会へ出場している。県内の障害者陸上競技クラブ「Step」が定期的に行う維新百年記念公園レクチャールームでの練習会へは、年齢、性別、障害の有無に関わらずクラブ会員、ボランティア、コーチ、理学療法士、高校生が参加している。「Step」の練習に生徒が自主参加するなど、在学中から生徒に対して地域スポーツクラブ・チームの練習への参加を積極的に勧めている。

3) カヌー・登山部

部員 10 人、指導教員 3 人のカヌー・登山部は、春から秋にかけては佐波川でカヌー、冬には防府市内の桑山・天神山・右田ヶ岳等で山登りに取り組んでいる。長期休業中には、卒業生と保護者が参加し、近隣県や九州への宿泊付き遠征を実施している。カヌーや登山の専門性を持つ教員が中心となって活動している。

4) その他運動部活動

10人の部員が所属する卓球部では、中央廊下に知的障害の生徒のための通常サイズの卓球台のほか、車椅子を利用する生徒のために低めの卓球台を設置して活動をしている。テニス部は近隣のテニスコートを利用して練習を行っており、部員はカヌー・登山部やバスケットボール部と兼部している。レクリエーション部では、手遊び歌、ダンス、風船バレーなどのレクリエーション活動を行っており、主に運動部への参加が難しい知的障害と肢体不自由の重複障害の生徒が参加している。

図表 2-69 防府総合支援学校の部活動の詳細

部名		車椅子バスケットボール	ソフトボール	卓球	テニス	
部員 (人)	部員総数(人)	5	2	10	4	
	兼部有無	無し	無し	有り (カヌー・登山)	有り (カヌー・登山、バスケットボール)	
	内訳	知的障害(単一)	0	0	7	4
		肢体不自由(単一)	3	0	0	0
		病弱(単一)	1	1	0	0
		知的障害と肢体不自由	1	1	1	0
		知的障害と病弱	0	0	1	0
		知的、病弱、肢体不自由等	0	0	1	0
指導員数 (人)	教員	4	3	7	3	
	教員以外	2	0	0	0	
活動状況	曜日	木	木	木	木	
	時間	15:50～16:30	15:45～16:30	15:40～16:15	15:40～16:50	
	時期	通年	通年	通年	通年	
	場所	体育館	グラウンド	中央廊下	学校近くのテニスコート	
主な 出場大会	①大会名(時期)	山口県車椅子バスケットボール 選手権大会(2016年6月)	なし	防府市障害者 親睦卓球大会 (2016年3月)	なし	
	②大会名(時期)	防府ライオンズクラブ杯車椅子・ FIDバスケットボール大会 (2016年11月)				
部名		バスケットボール	陸上競技	カヌー・登山	レクリエーション	
部員 (人)	部員総数(人)	19	14	10	10	
	兼部有無	有り(テニス、カヌー・登山)	有り(カヌー・登山)	有り(卓球、テニス、 バスケットボール、陸上競技)	無し	
	内訳 (人)	知的障害(単一)	12	11	10	2
		肢体不自由(単一)	0	0	0	0
		病弱(単一)	1	0	0	0
		知的障害と肢体不自由	5	3	0	7
		知的障害と病弱	1	0	0	1
		知的、病弱、肢体不自由等	0	0	0	0
指導員数 (人)	教員	7	9	3	9	
	教員以外	0	0	0	0	
活動状況	曜日	月・木	木	木	木	
	時間	15:50～17:00	15:45～16:30	15:40～17:00	15:45～16:30	
	時期	通年	通年	通年	通年	
	場所	体育館	グラウンド (雨天時は中央廊下)	市内周辺 県内外の山・川	教室	
主な 出場大会	①大会名(時期)	山口県FIDバスケットボール 交流大会(2016年7月)	山口県障害者 陸上競技記録会(2016年4月)	なし	なし	
	②大会名(時期)	防府市内オープン バスケットボール大会 (2016年8月)	キラリンピック兼 全国障害者スポーツ大会 選手選考会(2016年5月)			
	③大会名(時期)	防府ライオンズクラブ杯車椅子・ FIDバスケットボール大会 (2016年11月)	山口県障害者陸上競技記録会 (2016年9月)			
	④大会名(時期)	防府市総合 バスケットボール選手権 (2017年2月)				

(3) 運営体制

全ての部活動の活動日を毎週木曜日(通年)としている。バスケットボール部のみ、月曜日にも活動している。安全性を確保しながら異なる障害のある生徒が合同でスポーツを実施するためには、各部の部員数と部員の障害程度を考慮したうえで、教職員1人が生徒1~2人に対応できるよう、複数名の教職員を配置している。

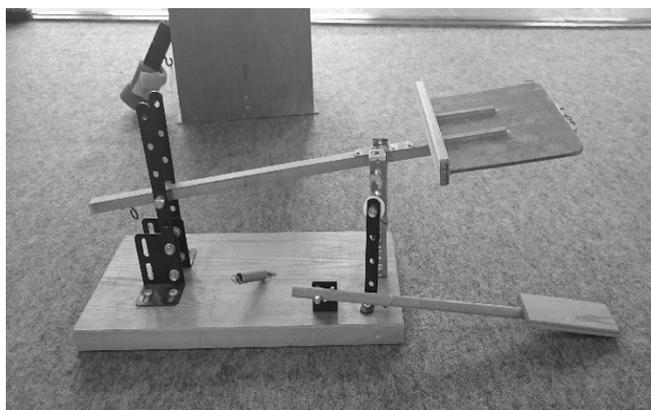
3. キラリンピック兼全国障害者スポーツ大会派遣選手選考会への参加

山口県と山口県障害者スポーツ協会主催の「キラリンピック」は、全国障害者スポーツ大会の予選会を兼ねており、2016年度は、3日間にわたって7種目が実施された。毎年、小学部から高等部までの児童生徒が出場している。キラリンピックへの出場は、競技日程が異なる複数競技への出場が可能のため、運動が苦手な児童生徒へは運動・スポーツの楽しさを学ぶことを目的に複数の競技への参加を勧めている。基本的に13歳以上の身体障害者、及び知的障害者、精神障害者が参加対象だが、小学部の児童に対しても、陸上競技(50m チャレンジ)や水泳(20m チャレンジ)等の小学生の部がある種目への参加を促している。より競技志向の高い中学部・高等部の生徒は、全国障害者スポーツ大会派遣選手選考会へ出場している。

4. 三学部三障害合同の運動会

毎年5月、小学部・中学部・高等部が三学部合同で運動会を開催している(図表2-70)。重度・重複障害の児童生徒も参加できるように、各学部の運動会実行委員、保健体育教員、担任教諭、障害児童生徒の四者協議によって、徒競走でのスタートラインの位置調整を行うなどして、参加における配慮・工夫内容を決定している。

重度・重複障害の児童生徒も同級生と一緒に運動会に参加できるよう、保健体育教員以外の他教科・領域の教職員の協力を得て、合科的な視点(複数の教科の内容を組み合わせることで効果的・効率的に指導)で、補助具の製作を行っている。



写真：高等部3年生「玉入れ」：障害によりボールを投げるのが難しい生徒は、独自に開発した器具を使い、手や足で板を押す反動を利用して、球を飛ばすことができる。

図表 2-70 運動会のプログラム(2016 年度)

順	演技種目	参加学部
1	選手入場	全員
2	開会式	全員
3	準備体操	全員
4	小学部 徒競走&パレード	小学部
5	中学部 徒競走	中学部
6	高等部 徒競走	高等部
7	つりの達人	PTA・同窓会・ すまいるルーム(定期相談)の幼児
8	およげ!みんなのこいのぼり2016	小学部
9	どっちが多い!?2016	中学部
10	筋肉番付2016	高等部
11	全校ダンス	全員
12	赤白決戦!大玉運び対決	全員
13	小・中学部 赤白リレー	選抜
14	高等部 赤白リレー	選抜
15	タオル体操	全員
16	閉会式	全員

山口県立防府総合支援学校

- 所在地：山口県防府市大字浜方 205-3
- 開校年：1968 年
- 学校種区分：視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱
- 学級実態：小学部、中学部、高等部普通科

鹿児島県立鹿児島養護学校

【特徴】

「スポーツ同好会」で教員の専門性や生徒の障害特性に応じて様々な種目を実施
外部指導員を活用し、専門家による指導で生徒は多様なニュースポーツを体験
体育館を鹿児島県総合体育センター主催の知的障害者のサッカーイベントに開放

1. プロフィール

(1) 設立経緯

肢体不自由の児童生徒のための学校として、1965 年に開校した。鹿児島市内の知的障害がある児童生徒の増加に伴い、居住地域に近い特別支援学校への通学を可能にするため、2013 年 4 月に新築移転したタイミングで知的障害と肢体不自由の児童生徒のための併置校となった。小学部、中学部、高等部普通科を設置している。障害の重度・重複化及び障害種類の多様化に対応できるように、全館バリアフリー対応している。

(2) 児童生徒数

2016 年 8 月現在、269 人の児童生徒が在籍している(図表 2-71)。知的障害の標準学級が全体の 6 割を占め、肢体不自由の標準学級は全体の 1 割、知的障害と肢体不自由を併せ持つ重度・重複障害学級が全体の約 3 割となっている。

図表 2-71 鹿児島養護学校の児童生徒数(2016 年度)

(人)

学級	小学部	中学部	高等部普通科
標準学級(児童生徒数)	68	45	68
重複障害学級(児童生徒数)	30	19	31
合計	98	64	99
訪問教育学級(児童生徒数)	3	0	5

(3) 『子どもの体力向上推進事業(「たくましい“かごしまっ子”」育成推進事業)』

鹿児島県内の児童生徒の体力テストの結果は全国平均と比較しても低い状況であったため、体力向上と運動の日常化・生活化を目的に、2011 年から 10 年計画で「子どもの体力向上推進事業(「たくましい“かごしまっ子”」育成推進事業)」を実施しており、第 3 期(2013・2014 年度)では県内の小・中学校 7 校が体力向上推進校として認定された。鹿児島養護学校は、県内の特別支援学校で唯一、対象校として認定され、「一人一人の体力向上を目指した体力づくり」を研究主題として掲げ、児童生徒の体力づくりに取り組んだ実績がある。事業終了後も、各児童生徒の実態に応じた運動・スポーツの習慣作りに取り組んでいる。

2. スポーツ同好会の現状

(1) 背景・目的

開校後、肢体不自由の単置校であった時は体育や自立活動の時間を中心に運動・スポーツに取り組んでいたが、2013年の校舎移転と併置校への変更に伴い、放課後活動として、運動・スポーツに取り組める環境を整えた。2015年には、「スポーツ同好会」として放課後活動から独立して活動を行うようになった。生徒の障害の重度・重複化に伴い、単独で部活を立ち上げるための十分な生徒数の確保が難しく、また、「地域スポーツ人材の活用実践支援事業」を通じた外部指導者の登用は運動部活動が基本条件だったことが、「スポーツ同好会」の発足の経緯である。

スポーツ同好会は、規則や規律を守る習慣を養いながら社会性・道徳性を身に付け、集団活動を通して主体的に取り組む態度の育成を図ることを目的に活動している。

(2) 活動内容

生徒は、グラウンド・ゴルフ、サッカー、卓球、テニス、ドッジボール等の多様な種目を体験することで、スポーツの楽しさを学んでいる。接触などの危険を避けるため、知的障害部門と肢体不自由部門は基本的に実施場所を分けて活動している(知的障害部門はグラウンドでサッカー、肢体不自由部門は体育館で卓球など)が、外部指導者による指導日には、グラウンド・ゴルフなどのレクリエーション種目を合同で実施することもある(図表 2-72)。また、12月の友愛駅伝大会に向けて陸上練習に取り組むなど、大会などに合わせて活動内容を変更している(図表 2-73)。



図表 2-72 スポーツ同好会の活動状況

活動内容	知的障害部門	肢体不自由部門
実施日程	毎週月曜日～木曜日の放課後 土・日曜日、祝日 (各種スポーツ大会・スポーツ交流)	毎週火曜日・木曜日の放課後 土・日曜日、祝日 (各種スポーツ大会・スポーツ交流)
実施場所	グラウンド 体育館 各種大会会場	グラウンド 体育館 各種大会会場
参加対象	Ⅱ課程の中学部・高等部生徒 自主通学・保護者送迎が可能	Ⅰ・Ⅲ課程(1)の中学部・高等部生徒 自主通学・保護者送迎が可能、寄宿舎生
参加人数 (2016年度)	21人	10人
担当職員	放課後活動係、体育科の職員を中心に指導を行う	

注1) Ⅰ課程: 肢体不自由の単一障害で、主として小学校・中学校・高等学校の該当学年に準じた教育内容もしくは該当学年の下学年の指導内容を代替して編成

注2) Ⅱ課程: 知的障害の単一障害で、小学部、中学部または高等部においては、各教科等を合わせた指導と教科別、領域別の指導及び総合的な学習の時間(中学部・高等部)とで編成

注3) Ⅲ課程(1): 主たる障害が肢体不自由で、視覚障害、聴覚障害、病弱または知的障害を併せ有する者で、小・中学部においては「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」第1章第2節第5の2を、高等部においては「特別支援学校高等部学習指導要領」第1章第2節第6款の2を適用し、知的障害教育指導内容を代替して編成

図表 2-73 スポーツ同好会のスケジュール

活動時期	活動内容や参加する大会
5～7月	フットサル練習、陸上練習、ニュースポーツ
7月上旬	フットサル大会参加
夏季休業中	ニュースポーツなど様々なスポーツ体験、卒業生や他校との交流練習・試合
9～10月下旬	バスケットボール、好きなスポーツを選択して実施
10月下旬～11月下旬	陸上(長距離)練習、バスケットボール大会、市障害者スポーツ大会に向けての練習
12月	市障害者スポーツ大会、バスケットボール大会、友愛駅伝大会
冬季休業中	ニュースポーツなどの様々なスポーツ
1～3月	サッカー練習・大会参加、ニュースポーツ

(3) 運営体制

放課後活動係と体育科の教職員が中心となって指導を行っている。保健体育免許を保有する教員は23人おり、大会時期や活動内容に応じて、競技経験のある教員が顧問を受け持つなど、教員の専門性を考慮しながら持ち回りで指導を行っている。

(4) 外部指導者の活用

2013年以降、体育の授業の更なる充実と運動部活動の一層の活性化を図るため、「地域スポーツ人材の活用実践支援事業」の一環で、障害者スポーツに専門的な技能を有する地域のスポーツ人材を外部指導者として活用し、教員との連携による効果的な指導の実践に努めている。

日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導員(上級)の資格を保有するハートピアかごしま(鹿児島県障害者自立交流センター)の職員が外部指導者として月2回程度、生徒の障害特性に応じて、グラウンド・ゴルフやボッチャなど、教員だけでは指導が難しい障害者スポーツ種目を指導している。また、理学療法士と障害者スポーツトレーナーの資格を保有するアスレティックトレーナーが年に4回、生徒と教職員を対象にストレッチ方法を指導した年もあった(2015年度)。積極的に外部指導者を活用することで、教員の負担を軽減できるとともに、専門家から障害者スポーツの指導法を学べ、教員による日常的な児童生徒の運動や保健体育の指導に生かすことができる。



3. 運動施設

グラウンドは自校の児童生徒以外にも開放している。2015年と2016年には、鹿児島県総合体育センター主催で、年に8回「知的障害のある人のためのサッカー教室」を開催している。同教室は、総合型地域スポーツクラブ「NPO 法人始良スポーツクラブ」主管で、FC・アラーラ鹿児島のチームスタッフが指導し、鹿児島市内の特別支援学校の教員が指導補助を行っている。リフティング、ドリブル、パスなどの基本練習を経て、最終日は練習の成果を発揮する場として試合を行っている。

4. 校内・校外・地域での運動機会の確保

(1) 外部団体主催の練習会・大会への参加状況

特別支援学校体育連盟組織がない道府県は全国に 28 あり、鹿児島県もその一つである。運動・スポーツの機会を確保するため、学校は児童生徒に対して地域の各団体が主催する練習会や大会への参加を積極的に促しているが、卒業生の参加はまだ少ないのが課題である(図表 2-74, 2-75)。そこで、学校は校外学習を通じてハートピアかごしま(鹿児島県障害者自立交流センター)の利用方法を学ぶ機会を提供している。また、教員が生徒や保護者に地域のスポーツ団体が主催するイベントに関する情報を提供するなどして、卒業しても地域でスポーツに継続して参加できるように児童生徒の自立支援に努めている。



図表 2-74 主な外部団体主催の練習会(2016 年度)

	練習会への参加		
	バレーボール	バスケットボール	サッカー
主催団体	鹿児島県手をつなぐ育成会	鹿児島県身体障害者福祉協会	鹿児島県総合体育センター
場所	ハートピアかごしま体育館	ハートピアかごしま体育館	鹿児島養護学校
頻度	月1回	月1回	月1回
参加生徒数	2人	4人	8人
参加職員数	3人	0人	3人

図表 2-75 主な外部団体主催の大会(2016 年度)

	大会への参加				
	鹿児島県障害者スポーツ大会	バスケットボール	サッカー	友愛駅伝	風船バレー
主催団体	鹿児島県障害者スポーツ協会	鹿児島県障害者スポーツ協会	鹿児島県障害者スポーツ協会	鹿児島南ライオンズクラブ	鹿児島風船バレーボール協会
場所	鴨池補助競技場	サンアリーナせんだい	鴨池緑地公園	マリポートかごしま	鹿児島アリーナ
頻度	年1回	年1回	年1回	年1回	年1回
参加生徒数	19人	2人	12人	16人	4人
参加職員数	18人	2人	13人	14人	3人

(2) かようタイム

日常生活における体力の向上を目的に、全学年の知的障害の児童生徒が、毎朝約 15 分間、グラウンド、体育館、プレイルーム、廊下スペースなどを利用して、ランニング、リズム運動、サーキットトレーニングに取り組んでいる。毎年 5 月の体力テストの結果をもとに習熟度や障害の程度に配慮してグループ分けを行い、各自で目標を設定している。休み時間、放課後、自宅でも楽しみながら取り組める動作・内容を実施することで、自主的に運動・スポーツが継続できることを目指している。

(3) 「体育科通信」での情報共有と連携

学校教育活動の中で行っている体育、運動学習、スポーツ同好会の様子を保護者や児童生徒に周知する目的で、「体育科通信」を発行している。職員、生徒、保護者間で、スポーツ大会の結果、各学部の体育の様子や指導内容などの情報共有ツールとして活用している。自宅で簡単にできる運動やストレッチ等を紹介することで、家庭での運動機会の確保にも繋げている。



鹿児島県立鹿児島養護学校

- 所在地：鹿児島県鹿児島市吉野1丁目42-1
- 開校年：1965年
- 学校種区分：知的障害、肢体不自由
- 学級実態：小学部、中学部、高等部普通科

広島県立尾道特別支援学校

【特徴】

聴覚障害と知的障害の生徒が合同で運動部活動を実施

卓球部・陸上競技部・ヒップホップステップ部で専門的指導を行える外部指導員を活用積極的に地域のイベントに出演し、学校の知名度向上と生徒の社会参加を支援

1. プロフィール

(1) 設立経緯

1955年、広島県立尾道ろう学校として開校し、2007年に「広島県立尾道特別支援学校」に改称した。2010年に知的障害部門(小学部・中学部)、2012年に知的障害部門(高等部普通科)を開設し、聴覚障害と知的障害の併置校となった。

「確かな学力の向上」「豊かな心の育成」「体力の向上」を教育目標に、特色ある学校を目指し、地域参画型の授業づくりや部活動を通して尾道市の特別支援教育を推進している。2016年度の学校経営目標のひとつに、「学校環境を充実し、幼児児童生徒のスポーツ・文化芸術の育成」を掲げている。

(2) 児童生徒数

2016年8月現在、119人の幼児児童生徒が在籍している(図表2-76)。聴覚障害部門は、幼稚部、小学部、中学部を設置し、13人が在籍している。5人が軽度の知的障害、または肢体不自由との重複障害児・者である。聴覚障害部門の高等部がないため、聴覚障害部門(高等部普通科・専攻科)を設置する広島南特別支援学校と定期的に学習交流を実施することで、中学部卒業後の広島南特別支援学校への円滑な進学を支援している。

知的障害部門(小学部・中学部・高等部普通科)には、106人の児童生徒が在籍する。知的障害部門の児童生徒の多くは、障害の程度が軽度である。近年、聴覚障害部門の児童生徒数は減少傾向にあるのに対し、知的障害部門の児童生徒は増加傾向にある(図表2-77)。

図表 2-76 尾道特別支援学校の児童生徒数(2016年度)

					(人)
	幼稚部	小学部	中学部	高等部	合計
聴覚障害部門	2	10	1	/	13
知的障害部門	/	22	33	51	106
合計	2	32	34	51	119

図表 2-77 尾道特別支援学校の児童生徒数の変化(2014~2016年度)

学部							(人)
年度	部門	幼稚部	小学部	中学部	高等部	部門別合計	合計
2014	聴覚障害	4	8	5	/	17	107
	知的障害	/	21	20	49	90	
2015	聴覚障害	4	9	1	/	14	114
	知的障害	/	23	23	54	100	
2016	聴覚障害	2	10	1	/	13	119
	知的障害	/	22	33	51	106	

2. 運動部活動・文化部活動の現状

(1) 目的

生徒の心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としてのルールや自覚を深め、協力して生涯にわたり、よりよい健康な生活を築くことを目的に実施している。

(2) 実施種目・参加児童生徒数

聴覚障害と知的障害の児童生徒が合同で部活動を実施している。運動部には、卓球部と陸上部、文化部には写真部、書道部、ヒップホップステップ部がある(図表 2-78)。小学部の児童は中学部進学を見据えた「体験入部」として部活動に参加しており、1 か月間の体験入部を経て、校長が入部の可否を判断している。

部活動や大会へ参加の条件として、公共交通機関を使つての自力移動か保護者の送迎がある者としている。「部活動の活性化」を重点目標として掲げており、2017 年度までに運動部・文化部の部活動参加人数の目標を 60 人としている(2015 年度は 47 人)。

図表 2-78 卓球部・陸上部(運動部)とヒップホップステップ部(文化部)の参加状況

部類		運動部		文化部(身体表現)	
部名		卓球部	陸上部	ヒップホップステップ部	
部員	部員総数	16人	12人	18人	
	内訳	聴覚障害	1(小学部)、1(中学部)	2016年度 なし	3(小学部)
		知的障害	14人	12人	2(小学部)、6(中学部)、7(高等部)
活動曜日		火・木・金	月・水・木・金	木	
活動時間		15:30～16:15	15:30～16:15	15:30～16:15	
活動場所		体育館	グラウンド	プレイルーム	
指導員数	顧問	1人	1人	1人	
	指導教員	3人	2人	4人	
	外部指導員	1人 (三原市卓球協会会長)	1人 (スペシャルオリンピックス日本・広島指導員)	1人 (民間ダンススクール講師)	

1) 卓球部

週3日(火曜、木曜、金曜)、体育館で活動しており、部員16人のうち、聴覚障害の児童生徒は2人、知的障害の生徒は14人である。外部指導者(後述)が会長を務める卓球大会に、生徒が出場できるよう配慮している。また、中国地区の聾学校の中・高生が参加する中国地区ろう学校体育大会が2016年度は山口県防府市で開催され、聴覚障害部門(中学部)の生徒が1人出場した。



2) 陸上部

週 4 日(月曜、水曜、木曜、金曜)、グラウンドで活動しており、部員 12 人は知的障害の生徒である。全国高等学校体育連盟に所属し、びんご運動公園陸上競技場で開催される尾三地区高等学校対抗陸上競技選手権大会や広島県高等学校新人陸上競技選手権尾三地区予選会に出場している。過去には、広島県高等学校陸上競技対校選手権大会の 5,000m 部門に出場した生徒もいる。



3) ヒップホップステップ部 (文化部)

尾道港祭協会が毎年 4 月に開催する尾道みなと祭「ええじゃん SANSAN・がり」踊りコンテストは、学校、会社、クラブや友達同士で参加して創作踊り「ええじゃん SANSAN・がり」を披露するイベントである(図表 2-79)。一般・グランプリ部門と幼児・小学校・中学校部門があり、近隣の小・中学校が部活動単位で参加する中、出場経験が無かった尾道特別支援学校では、児童生徒と保護者の要望もあり、出場を目的に 2014 年 1 月にヒップホップステップ部を設立した。



練習から聴覚障害部門と知的障害部門の児童生徒が合同で行っている。聴覚障害では、障害の程度や補聴器の装着有無などにより、聞き取れる音量や音質は異なるが、講師の動きが一番見えやすい最前列で、指導員の動きを模倣する形式を取っている。知的障害の児童生徒には、マンツーマンで指導教員を配置するなど、何度も繰り返し振付けや立ち位置を練習している。毎月第 3 木曜日に、外部指導者のダンスインストラクターによる指導を受けるほか、各部員に映像 DVD を渡し、自宅での練習も促している。そのほか、発表の機会として、「全国高等学校総合文化祭(ひろしま総文)」「尾道トラック祭り(様々な乗り物の乗車体験イベント)」「尾道特別支援学校文化祭」などがあつた。

図表 2-79 ヒップホップステップ部出演イベント(2016 年度)

出場イベント	日時	会場	備考
尾道みなと祭 「ええじゃんSANSAN・がり」踊りコンテスト	2016年4月23日	尾道駅前 ベルポール広場	尾道駅再開発の完了を期に(2002年)、 尾道みなと祭で始まったコンテスト
全国高等学校総合文化祭 広島大会 (ひろしま総文)	2016年8月1日	広島駅南口地下広場	高校生による国内最大の芸術文化活動の祭典
尾道トラック祭り	2016年9月22日	尾道トラックセンター	乗車体験イベントにおけるステージプログラム
尾道特別支援学校文化祭	2016年11月3日	尾道特別支援学校	

(3) 運営体制

部活動では、顧問 1 人を中心に複数の指導教員と外部指導者が指導をしている。教員が会議等で部活動に出席できない時に備えて、地域のスポーツ団体や民間ダンススクールの指導員を外部指導者として活用している。また、指導教員には、聴覚障害と知的障害の児童生徒に対応するために、保健体育科以外の教員も積極的に配置し、両部門から多くの教員が部活動に参加できるよう学校全体が支援している。

(4) 外部指導者の活用

卓球部と陸上部では、2012 年以降、広島県の「運動部活動外部指導者派遣事業」制度を利用して外部指導者を 1 人ずつ活用している。卓球部の外部指導者は、三原市卓球協会の会長で、現在、自身も現役の卓球選手として活動をしている。陸上部の外部指導者は、現在スペシャルオリンピックス日本・広島で陸上を指導している。外部指導者の指導は年 20 回のため、残りの練習日は教員が担当することから、外部指導者には、児童生徒への専門的な指導に加えて、教員への種目の指導法に関する支援も期待している。

広島県立尾道特別支援学校

- 所在地：広島県尾道市栗原町 1524
- 開校年：1955 年
- 学校種区分：聴覚障害、知的障害
- 学級実態：（聴覚障害部門）幼稚園、小学部、中学部
（知的障害部門）小学部、中学部、高等部

鳥取県立琴の浦高等特別支援学校

【特徴】

14人の教員が障がい者スポーツ指導員資格を保有し、全員が部活動を指導
知的障害の高等部を設置する特別支援学校5校で年に2回交流会を開催
4つの運動部で外部指導者を活用し、教員の負担を軽減

1. プロフィール

(1) 設立経緯

2008年、鳥取県教育審議会の「鳥取県における今後の特別支援学校のあり方」(答申)で、中部地域の県立高等特別支援学校の設置が施策の方向性として示されたことを受けて、2013年、知的障害の高等部を設置する特別支援学校として、旧赤碕高等学校を改築して開校した。2つの職業学科(生産流通学科・サービスビジネス学科)に6コースを設け、就職に向けた専門的な教育を行っている。1学年40人の定員で、入学選抜試験がある。

(2) 児童生徒数

2016年5月1日現在、全校生徒数は118人である(図表2-80)。重度・重複障害の生徒の在籍はなく、全員が軽度の知的障害者である。寄宿舎では41人の生徒が生活している。

図表 2-80 琴の浦高等特別支援学校の生徒数

高等部職業学科	1年	2年	3年	合計
生徒数(人)	40	41	37	118
学級数	5	5	5	15

2. 運動部活動・文化部活動の現状

(1) 目的

部活動は、体力技術と精神力の向上など、自らの目標を定めて達成に向けて努力することを目的に実施している。部活動を通して、挨拶、マナー、人間関係づくりなど運動・スポーツ参加における基本的な礼儀作法を身につけるため、年度始めには各部で「自分からあいさつをする(バスケットボール部)」「時間やルールを守り、協力して練習する(卓球部)」などの年間目標を設定し、活動している。

(2) 実施種目・参加児童生徒数

開校当時、運動部として陸上部、バスケットボール部、バレーボール部、バドミントン部が設置されたが、翌年度には新たにソフトボール部、卓球部、ダンス部が新設された。現在は、陸上・ソフトボール部、バスケットボール部、バドミントン部、ダンス部、卓球部が活動している(図表2-81)。

男女混合で各部10人以上の生徒が所属する。活動時間は、基本的に16時20分～17時15分の55分間だが、18時15分まで居残り練習が行える。

図表 2-81 琴の浦高等特別支援学校の部活動の詳細

部名		陸上・ソフトボール部	バスケットボール部	バドミントン部	卓球部	ダンス部
部員総数		16人	20人	31人	17人	9人
指導員数	教員	8人	7人	8人	7人	8人
	教員以外 (外部指導員除く)	2人	2人	2人	2人	2人
	外部指導員 導入有無	有り	有り	有り	有り	無し
活動状況	活動曜日	月・水(ソフトボール) 火・木(陸上)	月・火・水・木	月・火・水・木	月・火・水・木	月・火・水・木
	時期	通年	通年	通年	通年	通年
	活動時間	16:20～17:15	16:20～17:15	16:20～17:15	16:20～17:15	16:20～17:15
	活動場所	グラウンド	琴浦町農業者トレーニングセンター/体育館			校舎内
主な 出場大会	①大会名 (時期)	鳥取県障がい者スポーツ大会 (2016年5月)	全国障害者スポーツ大会 中四国ブロック予選会 (2016年5月)	スポーツ・レクリエーション in 琴浦町 (バドミントンの部) (2016年6月)	鳥取県障がい者 スポーツ大会(個人) (2016年5月)	学校祭での オープニング発表
	②大会名 (時期)	中国・四国身体障害者 陸上競技大会 (2016年6月)	琴浦町バスケットボール大会 (10～11月)	琴浦町総合バドミントン大会 (2016年11月)	琴浦町長杯争奪卓球大会 (一般の部・個人・団体) (2016年5月)	全国障がい学生体育大会 (韓国) (2016年6月)
	③大会名 (時期)	鳥取県知的障がい 特別支援学校高等部交流会 (9月上旬)	鳥取県知的障がい 特別支援学校高等部 部活動交流会 (11月下旬)	鳥取県知的障がい 特別支援学校高等部 部活動交流会 (11月下旬)	鳥取県知的障がい 特別支援学校高等部 部活動交流会 (11月下旬)	倉吉市部落解放文化祭 (2017年2月)
年間目標		・時間を守る ・あいさつ ・工夫する	・自分からあいさつをする ・真面目に練習に取り組む ・楽しく活動できる	・安全に注意して、楽しく活動する ・準備や片付けを自主的に行う ・体力がつかないように頑張る ・技術レベルをみんなで協力しながら上げていく	・基本を大切に、技術の向上を目指す ・時間やルールを守り、協力して練習する ・試合では相手をうやまい、全力をつくす。	・活動場所に入る時に、入る時に、あいさつをする ・最後のそじを全員で協力してする ・チームワークを大切に、楽しく活動する

(3) 外部指導者の活用

2014年以降、鳥取県障がい者スポーツ協会は「目指せパラリンピック事業」を受託し、特別支援学校における特別活動(部活動を含む)、体育授業等への外部指導者の派遣を積極的に進めており、2014年度からバスケットボール、卓球、陸上、バドミントンの4つの運動部で外部指導者を活用している。

就職に向けた専門的な教育を行う高等部職業学科の教職員の職務は多岐に渡り、運動部活動を指導する時間の確保が困難となっている。そのため、外部指導者を活用することで、教職員の負担軽減に加えて、生徒に対するより専門性の高いスポーツ指導を行えるようになった。

1) バスケットボール部

週4日、体育館と学校に隣接した琴浦町農業者トレーニングセンターで練習を行っている。ウォームアップではランニングのみ、またはドリブルをしながらランニングを行うなど、練習内容を生徒の習熟度に応じて計画している。2014年4月以降、週に2回、火曜と木曜に町内のスポーツ指導員を外部指導者として活用し、筋力トレーニング、フリースローやリバウンドブロックの方法などの技術練習を行っている。2016年5月には、第16回全国障害者スポーツ大会中四国ブロック予選会に、鳥取県代表として男子生徒6人が出場している。



2) 陸上・ソフトボール部

県内での積極的なソフトボールの普及を受けて、2014年に部活動でソフトボールを採用した。現在は、生徒数不足を補うため、「陸上・ソフトボール部」として週に2回ずつ陸上とソフトボールの練習を行っている。鳥取県障がい者スポーツ協会は、部活動の充実に向けて競技別強化指定校を決めて強化を行っており、陸上部が強化指定されている。保健体育科教員の繋がりや、スポーツ少年団での指導経験を有する指導者が週に2回、指導にあたっている。

3) 卓球部

2014年以降、町内の卓球同好会の指導員が外部指導者として週に2回、指導をしている。練習では、ラリー中におけるステップなど、専門性の高い指導を受けている。

(4) 運営体制

2016年8月現在、教職員総数は75人である。保健体育免許を保有する教員は13人おり、全員が特別支援学校教諭免許状を有する。なお、日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導員資格を保有する教員は、今回の調査の回答の中では最も多く14人おり、全員が部活動で指導にあたっている。

3. 県内の特別支援学校間の交流

県内には、知的障害の高等部を設置する特別支援学校が5校ある(琴の浦高等特別支援学校、倉吉養護学校、白兔養護学校、米子養護学校、鳥取大学附属特別支援学校)。5校は、毎年9月と11月に2回、運動・スポーツを通じた交流会を開催しており、2016年度で29回目を迎えた。25年間、4校(倉吉養護学校、白兔養護学校、米子養護学校、鳥取大学附属特別支援学校)で交流会を開催していたが、2013年に琴の浦高等特別支援学校が追加され、現在に至る。



(1) 鳥取県知的障がい特別支援学校高等部交流会 (2016年9月1日、全校生徒が参加)

知的障害の高等部を設置する特別支援学校5校は、毎年9月の平日、鳥取県立倉吉体育文化会館と倉吉市営陸上競技場を会場に、5校の全校生徒約320人が参加するスポーツ交流会を開催している。当日は、体育館交流と陸上記録会の2会場に分けて生徒間の交流を促している。

体育館での交流は、綱引き、ボール運び、玉入れなどのレクリエーションを中心とした種目で構成され、

他校の生徒とのスポーツを通じた積極的な交流を図るため、参加する 5 校で合同チームを編成して実施している。事前に各学校の担当教員が相談し、生徒の障害程度や運動経験に配慮して生徒の組み合わせとチーム数を決定している。陸上記録会では、100m 走、800m 走、リレー、ボール投げ、走り幅跳びなどが行われている。

(2) 鳥取県知的障がい特別支援学校高等部部活動交流会(2016年11月26日、部活動単位で参加)

毎年11月下旬の土曜日に、部活動を通じた学校間交流を目的とした「鳥取県知的障がい特別支援学校高等部部活動交流会」を、学校に隣接する琴浦町農業者トレーニングセンターで開催している。バスケットボール、卓球、バドミントンの3種目を実施され、各運動部から選手が出場し、トーナメント形式で試合が行われる。交流会に出場する3年生が中心となって当日の会場準備や片付けを行い、出場する生徒に帯同する教員(各校2人程度)は、主に審判員として当日の大会運営を担っている。

鳥取県立琴の浦高等特別支援学校

- 所在地：鳥取県東伯郡琴浦町大字赤碕 1957-1
- 開校年：2013年
- 学校種区分：知的障害
- 学級実態：高等部職業学科